



Title	ドイツ啓蒙主義研究19 （冊子）
Author(s)	
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2022, 19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト 2021

ドイツ啓蒙主義研究 19

福 田 覚
廣 川 智 貴
吉 田 耕太郎

大阪大学大学院言語文化研究科

2022

ドイツ啓蒙主義研究 19

目 次

『批判的論叢』24号におけるミルトン批評の言説 — 文学論争の再考にむけて(3) —	…………… (福田 覚) …… 1
---	-------------------

- 1 詩人の序列におけるミルトン
- 2 ドイツの読者層の成熟
- 3 言語圏に対する貢献、国民性
- 4 原作と翻訳の言語
- 5 ミルトン以外の詩人を評価する批評家の眼
- 6 論争の構図

対話小説への道 — J・J・エンゲルの理論と実践 —	…………… (廣川 智貴) …… 17
----------------------------	---------------------

- はじめに
- 1 『行為』の前史としてのゲスナー批評
 - 2 「行為」(Handlung)概念について
 - 3 「対話」と「物語」という形式について
 - 4 対話小説『ローレンツ・シュタルク氏』
- おわりに

野生児をめぐる18世紀の緒言説 1 — 言説の付置の確認 —	…………… (吉田 耕太郎) …… 31
--------------------------------	----------------------

- はじめに
- 1 野生児をめぐる想像力
 - 2 野生児のタクソミー
 - 3 野生児と自然状態
 - 4 野生児と言語の起源

『批判的論叢』24号におけるミルトン批評の言説

— 文学論争の再考にむけて(3) —

福田 覚

『ドイツ啓蒙主義研究』の前号では、ボードマーがミルトンの『失樂園』を翻訳してから、1740年にミルトン擁護の書を出版するまでの間に焦点を当て、文学論争の前夜という位置付けで、チューリッヒのスイス派とライプツィヒのゴットシェートとの間の遣り取りを改めて跡付けた。今後、ミルトン擁護の書が出されて以降の動きを見直して、文学論争の議論における啓蒙主義詩学史としての本質の部分の再考していくために、今号では、ライプツィヒで発刊されていた『批判的論叢』24号(1740年)の第4の論考²を読み直し、その言説のあり方について考察することにした。

この論考では、ボードマーのミルトン擁護の書が取り上げられ、批評の対象とされている。その末尾には、次のように書かれている。

「最後に打ち明けるが、もしもスイスの批評家たちが、彼らには我々の礼儀は何の役にも立たないこと、彼らは沈黙して無視されるよりもむしろ鋭く評価され非難されるのを望んでいることを、我々に非常に明確に理解させたりしなければ、この前書きについての我々の考えをこれほど自由に公然と表明することはなかっただろう。それに加えて、彼らはあえて、すべてを自分たちの洞察や考えで評価している。そうであるなら、我々はいつともは存命の書き手に対してはより穏やかな原理に従うことに慣れているけれども、我々にも同じことをする自由があるだろう。」³

辛辣な調子の文章へと切り替えたことの理由が述べられていて、啓蒙主義時代の詩学史を特徴付けた論争、いわゆる文学論争へと進んでいったことがうかがわれる。

本稿は、この『批判的論叢』24号の論考を主な検討対象とする。後述するように、ボードマーによるミルトン擁護の書のうち、とくにその序文を具体的に批判したもので、ボードマーの序文が11ページなのに対して、それを上回る17ページのテキストである。

1. 詩人の序列におけるミルトン

ボードマーは、ミルトンの『失樂園』を訳したときの前書きで、ミルトンの詩の内面的

な本質について別の機会に論じることを約束した。前号で見てきたように、約束したその書の出版をゴットシェートから再三催促された。ようやく 1740 年に、『詩における不思議なものとその真実らしさとの結合についての批判的論考』として考察が世に出された。これが、「ジョン・ミルトンの詩『失樂園』を擁護して」という副題が付されている、ミルトン擁護の書である⁴。

ゴットシェートは、1732 年 10 月 7 日付けのボードマー宛ての書簡で、「ミルトンの想像力がそうであったような、あのような無秩序な想像力（eine so regellose Einbildungskraft）が許される規則（Regeln）を知りたいと切望しています」⁵と書いていた。それに対してボードマーは、自身が擁護の書を仕上げるまでの間、偉大な詩人であるミルトンを非難するようなことはしないでほしい、とゴットシェートに頼んでいる⁶。それまでの一時的なものとして、『失樂園』擁護の基盤にしたいと考えている主要な原則を記してクラウドーに送り、クラウドーがそれをゴットシェートに伝えた。クラウドーはボードマーに、「ご送付いただいたミルトンの擁護を、さもなくば喜んでミルトンを批判するさまざまな人たちの前で読んで聞かせました」と報告していた⁷。こうしたことから、ゴットシェートがミルトンに批判的であることは十分にうかがわれるものの、ボードマーのミルトン擁護の書を待つ姿勢も同時に見て取れた。

ゴットシェートであろうと思われる『批判的論叢』24 号の匿名の筆者は、ボードマーの擁護の書に対して、その序文の部分を議論の俎上に上げている。そこでは、ミルトンに対する擁護の仕方に反論することで、ミルトン自身への批判がこれまでよりもっと明確になっている。

この筆者が最初に指摘するのは、ミルトンの『失樂園』は長い間埃にまみれていて、アディソンのような人が忘却から引き出しその名声を高めた、という点である。真に価値ある詩人ならそのような事後的な支援は不要だろうという言い方で、ミルトンの詩の価値に疑念を呈している。

「それでも確かなのは、ウェルギリウスは、死の 60 年後に忘却から引き出してくれるであろうまさにアディソンのような人を必要としなかったということである。」⁸

「従って、ミルトンに同胞がいくらか注意を向けるまで、アディソンのような偉大な人がミルトンのために書き疲れ、そればかりかいわば保証をしなければならないということは、ミルトンの詩にとって決して奇妙な徴候ではない。オーピッツは、その時代に、ウェルギリウスと同じように、代弁者を必要としなかった。」⁹

24 号の筆者は、優れた詩人に対しては不要な世間に広める役をドイツの地においてすることになったのが独訳者のボードマーだと見ている。

「しかしドイツでも、このイギリスの詩人に関して、我々を以前の無関心状態に放置しておきたくないという者がいた。スイスに翻訳者が現れ、私たちにこの詩人を、精一杯ドイツ語で届けようとした。・・・その翻訳者は、ドイツ中が直ちにアディソンの側に与して、ミルトンの失樂園をホメロスやウェルギリウスの脇に置くだろうという期待をしていた。しかしこの期待は、無駄であった。この新たに訳された英雄詩に関しては、人々はかなり冷淡なままであった。」¹⁰

そのあとに続く、よい本は自ずと人々に知られるものであるという議論も、やはり間接的にミルトンの価値を低く見積もるものとなっている。

「擁護者〔＝ボードマー〕は、彼の失樂園は知られていないと考えている。しかし、なぜ知られていないのか？よい本は自ずから知られるものである。ある人がそれを他の人にほめる。後者の人が読んでそれを再び他の人に奨める。そのように運んで、至るところで知られるようになる。」¹¹

「たとえば、カニッツやギュンターの詩に対しては、それを買って読んで他の人に称賛するのにとても熱心で、瞬く間に沢山の版を刷らなければならなかったドイツ国民が、ミルトンの失樂園ただ一つに関してのみそれほど無関心になったのは、どこから来ているのだろうか？」¹²

ボードマーは、ミルトンの『失樂園』はドイツではまだ十分に知られていないということを擁護の書の序文で書いていて、それを受けての論評である。

いま見てきたように、『論叢』の筆者は詩人の序列ということを考えている。古代人の模倣、近代人の模倣というふうに、優れた詩人を見出して模倣するということが詩学的思考の物語としてある場合に、詩人の優劣について正しい序列を考え出すということが重要になる。ここでの書き方は、ミルトンは、ホメロス、ウェルギリウス、オーピッツ、カニッツ、ギュンターといった者たちと同列ではないという見立てを論の最初に明確に示すかたちになっている。文学論争には、純粋に誰を優れた詩人と判断するのかという批評眼の争いという側面がある。

2. ドイツの読者層の成熟

『論叢』24号の当該論考の筆者が書いている詩人の序列についての上述の議論は、忘れて埃をかぶってしまうとか、すぐさま評判になって広まるといった事象に関して、基本的に読者層が書物の価値を正しく判断して反応できるという前提に立っていることをう

かがわせる。このことがすでに、ボードマーとは異なる地平に立っていて、枠組みである理解の物語が違うことを示唆している。

ボードマーは、擁護の書の序文で、イギリスとドイツで読者層の傾向性が異なるということを書いていた。イギリス人には崇高さに対する感受性 (Empfindlichkeit) があるというボードマーの見方に対して、24 号の論者は、それはイギリス人に自然と備わったものではなく、アディソンに誘導されてそれを感じるように仕向けられたものだと言っている¹³。ボードマーの次のような書き方も、ミルトンが認められるようになったのはアディソンのお陰だとする点では同じと言える。

「ドイツ人は、ミルトンの作品において、なじみがない未知の、あまりに多くの高貴な種類の美によって、いわば不意を襲われ、混乱させられるのである。まるで長年暗い地獄に閉じ込められていた人が、あるとき快い陽の光が当たる場所に引っ張り出され、直面した美によって照らされるというより目が眩んでしまい、美を一つずつ認識するには時間を要するようなものである。イギリス人に対して有能な芸術批評家がミルトンの詩の美しさを徐々に知覚させ、それを知らしめてきたのだが、そうなる前にイギリス人が長い年月置かれていた状態にドイツ人は今なおいるのである。」¹⁴

もっとも、24 号の論考の筆者は、ギリシアやローマだけに偉大な詩人がいるというのか、我々のところにはタッソーはいないのか、イギリスにも偉大な詩人はいる、ミルトンの『失樂園』が我々の英雄詩だ、というふうにアディソンがイギリス国民の名誉心をくすぐっただけのような皮肉な表現をしていた¹⁵。ボードマーの方は、アディソンのおかげで読者がミルトンの詩の美しさが分かるようになってきたと考えている。ここでは読者層が言語を共有する国民という単位で見られている。そして、アディソンを一例としてここで問題となっているのは、良き趣味の形成に関わる批評家の役割である。無理に誘導しているのか、よい誘導をしているのか、その働きの意味合いが問われている。

読者層の趣味の形成という点については、『詩的な趣味の本性に関する往復書簡』¹⁶と題された、1736 年にボードマーが匿名で出版した往復書簡がある。偽名が使われていて架空の往復書簡ということになっているが、根底にあるのはボードマーとカレーピオの往復書簡である。対話する二人のうちエウリズスというのがボードマーの偽名である。この書の最も主要なテーマは「趣味」で、書の冒頭で、生まれつき備わっている自然な趣味が様々な要因で墮落してしまうというエウリズスの考えが示されている。感覚的な趣味だけでなく、思考のなかにある良いもの、美しいものを認識する趣味も、万人に等しく自然から与えられているが、悟性よりも記憶の方に気を配る不手際な教師のせいで墮落してしまう、という¹⁷。つまり、趣味の水準は低下するものと考えられている。

1740 年のミルトン擁護の書に戻ると、ボードマーの考えによれば、ドイツでミルトンに対する反響が広がらないのは、ミルトンのような優れた詩人を知らないドイツ人が、平凡

な詩人から感じるよくある楽しみをすぐには手放せないためである¹⁸。つまり、ドイツ人の趣味の水準は低下していて、イギリスのアディソンのような批評家の登場が望まれるということである。

『論叢』24号の筆者は、イギリス人の間で『失樂園』に対する今日の尊敬をもたらしたのは、アディソンの手練などによるもので、ミルトンの『失樂園』の自然な作用ではないのであるから、ミルトンがドイツでも敬意を集めるという幸運は期待できない、と言う。ドイツにはアディソンに当たる人がいないし、ドイツ人にとってミルトンは同国人ではないので身量肩は期待できない、というわけである。『失樂園』が称賛されない原因を作品ではなく読者層に帰そうとするボードマーの擁護論は、このようなロジックによって、『論叢』では否定される。

ここでのチャーリッヒとライブツィヒの対立点は、理論的な枠組みというよりは、どちらかと言えば現状診断にあると言えそうである。ドイツの読者層の現状に問題点があるとするのがボードマーで、それを否定するのがライブツィヒの側である。

3. 言語圏に対する貢献、国民性

上述のように、イギリスとドイツでは読者層の成熟の度合いが違うという視点をボードマーが持ち出したことで、国民性ということが文学論争の一つの切り口を形成するようになっていく¹⁹。『論叢』の筆者は、祖国や祖国の詩人を悪く言い、自分が翻訳したからと言って外国の本の称賛を強制しようとする「この独断的な芸術批評家」を退けるべく、ペンを取らざるをえないと述べる。

アディソンがイギリス人になしたのと同じ貢献をしたいというなら、ドイツにミルトンを紹介するのではなく、たとえばフォン・ホーベルクの叙事詩『ハプスブルクのオットーベルト』であるとか、あるいは、『プロセルピナ』や『ヴィッテキント』であるとか、あるいは古いスイスの吟唱詩人の詩であるとかを探し出して、アディソンが『スペクテイター』でミルトンに関して行ったように、たとえば『画家談論』で称賛すればよいのであって、それを何故しなかったのか、と非難する²⁰。あるいは、それでもまだ不十分だと言うなら、どうして自らミルトンになって、オーストリアのユピテルに対するアルプスの巨人の戦争を英雄詩にして我々に歌わないのか、と問い糾す²¹。

アルプスの巨人の戦いを歌った英雄詩などと聞くと滑稽に感じられるが、これは『論叢』の評者がミルトンの詩をそのようなものと捉えていることが言い方に反映されていると見ることができる。その批判の軸は、祖国の文学に貢献することにある。ボードマーの立場では、ミルトンの優れた英雄詩を翻訳し、ドイツの読者層が成熟していくことを期待するという考え方で、それも貢献の一つの形のように思われるが、『論叢』の筆者は、アディソンとイギリス人の関係と相似形となるような貢献を求めている。こうした捻れの根底にあ

るのは、やはり、ボードマーはミルトンを評価し、ドイツの詩人や読者を相対的に低く見ているのに対して、その批評者の方はミルトンを評価せず、ドイツの詩人や読者を相対的により高く見ているという批評眼の違いである。

また、ボードマーは、ミルトン擁護の書の序文で、ドイツ人の哲学気質を指摘して、「悟性の楽しみが心の全体を占めてしまい、それが想像力の楽しみを抑え付ける」²²、と述べていた。これもボードマーが見る、ドイツでミルトン受容が広がらない理由の一つであった。『論叢』の筆者は、それに対して、次のように書いている。

「彼〔ミルトンの擁護者〕は、次のように言う。ドイツ人はあまりにも哲学をやり過ぎた。綿密な学問と抽象的な（普遍的な）真理へと傾倒することで、少し前から、とても理性的で類推的になっているが、同時に、力強さがなく無味乾燥でもある。悟性の楽しみが心の全体を占めて、それが想像力の楽しみを抑え付けた、と。少しもそうは見えないが、もしそうだとしたら、それはきっとドイツ国民には何ら不名誉ではなく、しかしミルトンの詩にはほとんど名誉とならないだろう。ドイツが、この 20 年間、以前よりも哲学を行ってきたのは本当である。理性は、同胞たちの間で、非常に研ぎ澄まされ、野卑な機知は抑制され、奔放な空想は然るべき範囲のなかに限定された。それによって、自由学芸における趣味も今や幾重にも改善され、以前なら天上にまで持ち上げていたものを軽蔑し始めた。ホフマンズヴァルダウやローエンシュタインや他の似たような虚飾的な（schwülstig）詩人たちが没落したのは、もっぱらこの哲学的な光のおかげである。その光によって、こうしたまやかしの考え方、書き方をしている者たちの取るに足らない輝きを我々は照らし出したのである。」²³

国民性としてドイツ人が哲学に傾倒したことが、バロックの虚飾の文学がまやかしであるということに気付かせてくれたのであって、それは喜ばしいことだと考えられている。筆者はさらに続ける。

「しかし、想像力の楽しみがそれによってすっかり台無しになってしまったというのは大間違いである。むしろ、健康な火を作品のなかで覗かせるすべての良き詩人がそれによって大いに利益を得たのである。・・・ホメロス、ウェルギリウス、タッソー、フェネロンは、それによって何も失わなかった。しかし、『アルミニウス』や『バニーゼ姫』やこうした碌でなしたちの他の作品は、以前の絶頂からすっかり突き落とされてしまった。ミルトンも同じように口に合わないということになりそうだとすると、哲学的に思索するドイツがそれに何の責任があるだろうか。ドイツは、間違いなく、このイギリス人にも、ローエンシュタインやツィーグラーのような虚飾（Schwulst）、途方もない想像、大げさな表現、正しくない判断力が支配しているのを見ている。」²⁴

ドイツ人が哲学的に思考するようになってバロック文学は克服されてきたのであり、ミルトンもまたそうした哲学的な思考の光によって退けられるべきバロック文学と同列のところに明確に位置づけられている。

チューリッヒとライプツィヒの論争は、文学の現状に対する診断的批評眼の違いに拠るところが大きいように思われるが、こうした文章を読むと、批評眼の違いと思われたものの背後にさらに判断の傾向性というものがあるようにも感じられる。哲学的に考えすぎて悟性の楽しみが心を占めてしまい、ドイツ人は想像力の楽しみが抑え付けられていると書いたボードマーに対して、『論叢』の筆者は、哲学の光は良質の文学のみを残すことに役立っていて、想像力の楽しみを奪うことにはなっていないと見ている。後に文学史記述において文学論争が想像力重視と悟性重視の違いのように総括された要因の一つはこうした箇所にあるようである。しかし、そうした簡潔な二項対立に圧縮される以前の元の記述を読み直していると、ライプツィヒの側には、バロックの虚飾の克服という物語があり、それがドイツの国民性を擁護するという物語と結び付いているようにも見える。

後の世の人は、後世の文学史を構想するところから遡って補助線を引いて、進歩史観で考えた時に進歩に寄与する側はどちらかという判断をして、スイス派の想像力という概念に時代の先駆けのようなものがあるというふうに読み込んできたと思われる。あるいは、そこに書き込んできたと言ってもいいのかも知れない。しかし、ここでの『論叢』の記述は、ミルトンの『失樂園』がドイツ的な啓蒙の哲学的な吟味に耐えられない、バロックと同列のものではないかと問うているのであって、それが当時の時代感覚の一つだったとも言えるのではないだろうか。

このあと、『論叢』の筆者は、ボードマーがドイツ人には美しい作品を感受する自由な精神が欠けているとすることに対して、ギリシア人にもローマ人にも、イタリア人、フランス人、イギリス人にもそれがあって、ドイツ人にだけ英雄詩を正しく評価するだけの落ち着いた想像力がないと言うのかと異議を唱えている²⁵。

4. 原作と翻訳の言語

ボードマーは、擁護の書の序文で、一般論として、すべての詩的な作品の翻訳は原作に劣るというのはある意味で本当で、ミルトンの詩の翻訳に関してもそれが当てはまる可能性がある、ということを書いている。しかしながら、ミルトンの翻訳に関して一層そういう考え方に傾かせるであろう二つの仮定、英語はドイツ語よりも表現に関しては巧みで柔軟性があるという仮定と、ミルトンの詩の美しさの大部分は詩行の快い響きにその本質があるという仮定については否定的見解もありえて、とりわけ自身は後者の仮定に対して否定的であるという微妙な書き方をしている²⁶。

これに対して『論叢』24号の筆者が書いている批判は、様々な点で辛辣である。

「しかし、こうした言い逃れの弱さを翻訳者氏自ら気付き、それ故、『失樂園』は独訳後はミルトンの『〔失〕樂園』ではないと認める。古い詩は翻訳によって多くのものを失う、とりわけその言語が表現に対してはるかに柔軟性がある英語の詩はそうである、と。我々がそもそも筆者氏に対してあらゆる翻訳の弱さを認めようとすれば、ダシエ夫人が散文訳ではあるがその翻訳でホメロスをより素晴らしくした恩義をどうして我々はダシエ夫人に対して有しているのか、分からなくなるであろう。そのことから推論するに、翻訳者であっても詩をよりよくすることはできるのである。」²⁷

「こうした言い逃れ」というのは、その前に言及した、ドイツの読者には自由な精神が欠けているとした点である。ここでは、翻訳はどうしても原作よりは劣るものだという方向の議論そのものが否定されている。『論叢』の筆者は、ドイツ語でも美しさと強さという点で原典に劣らない翻訳はできるという。ただし、そのようなことを一般化して言いながら、スイスに向けた皮肉も書き添えている。

「しかし言語の柔軟性という点に関して言えば、ドイツのいくつかの地方（Provinz）の言語は、外国語の言い回しに適応するにはかなり硬直的で柔軟性がないということは、ひょっとしたらある程度本当かも知れない。」²⁸

そのあとさらに、ミルトンの英語の「強み」というのがどういうところにあるのを『論叢』の筆者は見えていくのだが、ボードマーがミルトンの英語表現に認めているであろう柔軟性の美について強く疑問を向ける内容になっている。この筆者は、ミルトンを大いに賛美している学のあるイギリス人がこの冬にライプツィヒに滞在していたので、ミルトンの言葉の強みについて実際に訊いてみたという。そこで聞かれた答えは、「文法に対する誤り、あらゆる通常の語結合の歪曲、そして、千にも上るその他の普通は許されない、他の詩人は犯すことの無い間違い」にそれがあるということであった。しかし、ミルトンの場合、その極めて普通ではない内容のために素晴らしいと見做される、という。

「そうしたことがある言語を豊かで柔軟にするのなら、言語を駄目にして、あらゆる規則に逆らって振る舞い、ほとんどすべての言葉で間違いを犯すだろう、と私は思った。」²⁹

翻訳が原典の言語の詩的価値を維持できるかという以前に、原典の言語にあるとされる詩的価値に疑念が向けられている。

さらには返す刀で、『失樂園』の翻訳のドイツ語に関しても、不快なものではないかという疑念を向ける。ドイツの読者は、この不快な響きに関して、本全体を通して自分の耳に

暴力をふるい続けられるのに耐えられるのだろうか、と考へ、『論叢』の筆者は自ら実験を行った。ドイツ語に訳されたミルトンの最良と思われる部分を、可能な限り生き生きとした発音で、日頃詩を熱心に読む人たちの前で朗読して聞かせたというのである。そうしたところ、どんな本でも聞いたことがない奇妙で不快なドイツ語の表現や、この詩人のぞつとする荒々しい考へのせいで、たちまち吐き気を催し、もう止めてほしいと言われた、という。こうした批判の言説は、どういうものを詩として評価するかという理論枠組みが異なることに由来するというよりは、どちらかと言えば、これは端的に認められないという烙印を押すような批判の仕方に映る。

1738年の『論叢』の20号には、ボードマーの詩が掲載されている。その掲載前の1738年7月30日のゴットシェート宛ての書簡では、ボードマーが、耳への響きということを考へながらこの詩を手直した、ということを書いている。さらには、『失樂園』についてもそうしたいと思っていたということも打ち明けている³⁰。従って、ボードマーも、詩を聞いたときの耳の心地よさを考へていたことはたしかだが、『論叢』のこの筆者の実験報告は、多少の手直しという水準の話ではなく、規則に反したミルトンの言語表現は翻訳しても不快なものにしかないという強い非難となっている。

詩を評価する際の「耳に快い響き」という観点は共通して有していながらも、チューリッヒとライプツィヒの双方では、ミルトンの通常とは異なる、今日の使用基準から逸脱した言語表現への態度は大きく分かれている。

5. ミルトン以外の詩人を評価する批評家の眼

ボードマーのミルトン擁護の書は、ドイツの読者だけでなく、ドイツの芸術批評家にもミルトンが理解されない問題の一端があると述べていた。ドイツの芸術批評家は、『失樂園』だけでなく『イリアス』、『オデュッセイア』、『アエネイス』、『解放されたエルサレム』にも敬意を払っていないので、ミルトンに敬意が払われないのは、芸術の側に不足や不十分さがあるのではなく、芸術批評の側の能力不足に帰着するのではないかとボードマーは見ていた³¹。

それに対して、『論叢』の筆者は、ボードマーがミルトンに対して行ったようにホメロスやウェルギリウスに対して本を書くという芸術批評家はまだいないが、こうした詩人には大げさな称賛は要らないと考へられているのかも知れない、と異論を唱える³²。先にドイツの読者層に関して、良い詩人は自ずと知られて読まれるものなので取り立てて浸透の手立てを考へる必要がない、と述べたのと同型の言説と言える。

このライプツィヒの筆者は、足りないのはこうした詩人たちのよい翻訳かも知れない、と言う。その見方に拠れば、学のある者のなかでもホメロスやウェルギリウスを母語で停滯せずに読める者は少なく、それができたとしても他の仕事や楽しみのせいでそれをして

こなかった。フランス語の翻訳が十分頻繁に読まれてきたのとは対照的である。また、詩人の模倣ということと言っても、ドイツでは、古代の詩人よりもよくないお手本が選ばれている、という。スイスの芸術批評家でさえ、そのようなことを熱心に行って前書きで自慢してしまうようなドイツの詩人を最も褒めそやして、存命中の最大の詩人と宣言してしまう³³。ここでは、ドイツにおける文芸の現状診断を、学のある芸術批評家という角度から語っているわけだが、その背後には、古代の詩人を上位に置こうとする筆者の文学史観が見え隠れする。

『論叢』の筆者は、こうしてホメロスやウェルギリウスについて言えたことが、タッソーにまで当てはまっていたとは言わない。その認識に拠れば、タッソーの作品は、魔女だの悪魔だのということで、今日のドイツでは、ミルトンと同じぐらい喝采を得ていない。ミルトンの場合は、無秩序、死、罪、地獄、その他の途方もない想像のせいで喝采は得られていないが、タッソーもそれと同じだということである³⁴。従って、ドイツの芸術批評家は、ホメロスやウェルギリウスやタッソーも認めることができないでいて、ミルトンを見る目がないのもそれと同じだ、というボードマーの主張に対しては、ホメロスやウェルギリウスについては上述のような事情があると思われるし、タッソーは、ミルトンと同様ということで、そもそも認められる様子ではない、ということが言われているのである。

タッソーに関しては、ギーゼの研究³⁵が着目したように、ゴットシェートが下す評価には両価的なところがあるように思われる。『批判的詩論』では、すでに「1730年」の初版から「詩における真実らしさについて」の章で、他の者より優れてはいても、それに劣らずしばしば真実らしさに対して過ちを犯してきた、と書かれている³⁶。その記述は、1751年の第4版まで変わらない。

しかしまた、先に本稿第3節で見たように、ドイツ人の哲学の光によって、ホメロス、ウェルギリウス、タッソー、フェネロンは何も失わなかった、と言われていて、そこではタッソーは哲学的吟味に耐えられる詩人であった³⁷。

さらには、これもギーゼが指摘しているところだが、1743年の『論叢』30号では、匿名の筆者がタッソーをイタリアで最高の詩人と非常に高く評価している。『解放されたエルサレム』には古代人の規則が根底にあり、ギリシア人やローマ人の最高傑作を模範としている、という。しかし、この筆者は、あらゆる過ちがないという訳ではないとして、ゴットシェートが『批判的詩論』の「詩における真実らしさについて」の章でタッソーについて論じた箇所を参照するように求めている。それでも、ホメロスやウェルギリウスにも過ちはあるもので、タッソーから上述の称賛を取り上げることはできない、と述べている³⁸。

この30号の文章は、タッソーの『解放されたエルサレム』の新しい翻訳について紹介するもので、訳者について、文体という点で、タッソー自身と同じぐらいミルトン的な虚飾(Schwulst)から離れている、と評している点が目を引く³⁹。

因みに、こうしたゴットシェート側の評価に反応したのがピューラで、1743年に次のように書いている。

「最近、教授殿〔＝ゴットシェート〕がタッソーの翻訳を、ミルトンの虚飾に対する解毒剤として、予告した。両者自身を、あるいはボアローだけを読んだ者は、そのことについて大変不審に思うであろう。というのも、タッソーの場合、我々がローエンシュタインに対して非難する過ちが、すっかり打ち明けると、比較にならないぐらい多い。そればかりか、いつもミルトンの百倍はある。ローエンシュタインの趣味を持ち込もうとするのは誰なのか、ボードマー氏かゴットシェート（G*ttsch*d）氏か。・・タッソーの美しさに関して言えば、逆に、この偉大な精神の持ち主が、古代人の高貴な崇高さを模倣しているところでは、ミルトンに非常によく似ていて、ラティーンの双子の息子、ピコとラウレントのようである。」⁴⁰

ゴットシェートは、ボードマーによるミルトンのドイツ語訳を批判して、コップによるタッソーのドイツ語訳を評価しているが、ピューラの眼にはそれは筋の通らないことのように見えている⁴¹。

実際に 1744 年にヨハン・フリードリッヒ・コップによる『解放されたエルサレム』のドイツ語訳がライプツィヒで出版されると、文学論争の余波のようにして、ゴットシェートはコップの翻訳を肯定的に評価し、逆に、チューリッヒの側では否定的に反応するということになった⁴²。

本節ではとりわけタッソーをめぐる評価についていくらか詳しく見たが、ミルトン以外の詩人を見る批評眼がどのように発揮されているかも文学論争の契機であり、ミルトンを見る眼があるかどうかということをめぐる論争は、そうしたより大きな視野のなかに埋め込まれている。ボードマーは、ミルトンの翻訳が評価されないこと的一端として、ドイツの批評家の批評眼を問題にしたが、それにライプツィヒの側は反発していると見ることができる。

6. 論争の構図

『論叢』24 号の文章は、ボードマーの書の序文だけを取り上げて、紙幅がなくなったということで、本全体については立ち入って論じていない。最後にその書の目次を紹介して終わっている。ただし、本全体の内容について細かく広範に論じれば、大半の部分で異論を伴うことになるだろうとしている⁴³。24 号の筆者は、「私たちドイツ人のこれまでの趣味をミルトンの『[失] 楽園』に関して弁護して、満足している」⁴⁴と述べているので、「ドイツ人のこれまでの趣味」というのがこの筆者にとって最も重要な論争の賭け金であったと推察できる。

本稿では論点を 5 つの節にまとめてきたわけだが、結局のところ、チューリッヒの側と

ライプツィヒの側では、思考の理論枠組みが異なるのか、理論枠組みは共有しているなかで下す判断が異なるのか、あるいはむしろ、理論的な基礎付けよりも個別的な趣味判断の方が先行しているのか、そうした言説の在り方についてはどのように考えればよいだろうか。本稿は『論叢』24号の1つのテキストを取り上げたに過ぎず、そのテキストも、ボードマーのミルトン擁護の書の序文を取り上げたに過ぎないことを念頭に置いた上で、ここでの論争の構図を分析的に考えてみたい。

これまで見てきたように、根本のところで、ボードマーは、『失樂園』のドイツ語訳が評判にならないのは、ドイツ語圏の読者や批評家に問題があると捉えていて、ゴットシェートと思われる『論叢』24号の筆者は、その点を否定している。この場合、一方の作者や訳者、もう一方の読者や批評家との間で、詩の良し悪しについての認識に落差があるという見立ては共有されていて、どちらの側に難があるかという判断が異なっている、ということのように見える。また、読者や芸術批評家を、場合によっては作者や訳者も、言語を共有する国民単位で考えようとする視角も共有されている。

前号で見たように、ボードマーがミルトンを訳して以降、ゴットシェートとは書簡等を通じて遣り取りがあり、そこでの考えの違いが論争の下地になっている。それが行き着いた先のこうした論争では、詩人の優れた才や受容者の趣味を判定する批評眼が先行しているのか、その批評眼の背後には異なる理論的な枠組みがあって判断を支えているのか、その比重を見極めるのは難しい。『論叢』24号の議論の仕方は、批評眼が前面に出てきている印象を受けるが、理論的な枠組みとしても、いくつかの点が浮かび上がってくる。

1つは、ドイツ人の哲学気質に対する評価というところから窺える、悟性の楽しみが想像力の楽しみを抑え付けると見るのか、悟性の吟味がむしろ虚飾的な文学を克服させてくれると見るのか、というところでの両者の理論的傾向の違いである。2つめは、通常の言語使用から逸脱したミルトンのような表現手法を、詩的な柔軟性があると捉えるか、不快な響きを生み出すものと捉えるか、詩的言語についての考え方の違いがある。3つめとして、悪魔や地獄といったものにまで想像を広げる詩の創作を、高みの世界の表現の一端と捉えるか、「真実らしさ」に反するものと捉えるかで、見方が分かれる。これらの観点が、ミルトンに対しても、ミルトン以外の古代や近代の詩人に対しても、詩人が模倣すべき対象かどうか、読者の良き趣味の対象となるかどうか、評価を下す視点として関わってきている。こうして見たとき、ライプツィヒ側の言説の視点はどれも、虚飾的で真実らしさに反するバロック文学の表現について、その形式や内容の克服を一貫して追求していると思われることができそうである。

『論叢』24号から11年後になるが、ゴットシェートは、1751年の『批判的詩論』第4版で、「詩における真実らしさ」の章の締め括りとして、次のような文を書き加えた。

「そうすると、まさにミルトン風に、霊界、ケルビムとセラフィム、あらゆる種類の悪魔、あるいは妖精と魔女に関して我々を困らせる者たち、これらすべてのことにお

いて、あらゆる理性を越え、従ってあらゆる真実らしさを越えた宗教の秘密を我々に語る者たちのことは、どう考えて、どう言えいいだろうか。こうしたことで、彼らは、私たちに対して詩芸術の領域を人間的な考えを越えて広げていき、真理や真実らしさに反する危険に絶えず行き当たる。というのも、啓示宗教を彼らの悪趣味な創作で拡大すること、つまり、真理を嘘で飾り立て、そのようにして真理を、詩人なら誰もが思いのままにひねくり回す異教の神話と同じにしまうことが、神を畏れぬものであるのは言うまでもないが、そのような詩人は、その上さらに、熱狂者 (Schwärmer) ではなく利口な読者のためにはたらく理性的な詩 (Poesie) に対しても過ちを犯しているのである。ヤーコプ・ベーメとポルデツチュ (Pordätsch) なら、彼らの夢や脳の産物を宗教に混ぜるかも知れない。賢明な詩人は真実らしさのもとにとどまる。それはつまり、人間的なもの、その真実らしさを評価することが、私たちの洞察の限界を超えないようなもののもとにとどまるということである。」⁴⁵

ここで念頭にあるのは、ボードマーとブライティンガーの詩に対する考え方であろう。ゴットシェートは、ヤーコプ・ベーメと、ベーメに共鳴するジョン・ポーディジ (John Pordage) の位置にミルトンを置いている。議論の核となっているのは、この章の「真実らしさ」の概念である。熱狂者と利口な読者を対置したり、ゴットシェートから見て好ましくない詩的な想像について「夢や脳の産物を宗教に混ぜる」という言い方をしているところに、ゴットシェートが到達した考え方が凝縮されているようにも思われる。

『ドイツ啓蒙主義研究』17号では、クロップシュトックの『救世主』についてのチューリッヒとライプツィヒの論戦を取り上げた。ボードマーは、『救世主』にはミルトンの精神が織り込まれているとして、ミルトンの崇高を理解する趣味がドイツ人に備わることに期待を寄せていた。もう一方のゴットシェートやゴットシェート派の側は、健康的な理性を基準として、虚飾や無意味な熱狂というものを批判していた。そこでの議論も、今号で見てきたミルトンをめぐる論争の構図の延長上にあると見てよさそうである。

本稿の議論をまとめるとすると、次のようになるだろうか。ゴットシェートの側は、ミルトンのようなバロック文学の虚飾を克服するというかたちで時代を前に進めるという物語を考えている。ボードマーの側は、ミルトンの崇高が理解されるようにドイツの読者や批評家の趣味が向上することで時代が前に進むという物語を考えている。このようなかたちで論争の構図を捉えることが可能であろう。その際、優れた新旧の詩人の模倣という観点で言えば、ゴットシェートにとってはミルトンは模倣すべき対象には含まれず、ボードマーにとってはもちろん含まれるということになるだろう。そこに記録されているのは、古典的な基準に当てはまらないように見えるミルトンのような存在をどのように受け止めればよいのかというこの時代の戸惑いであり、議論の幅である。現代の文学史記述は、たとえばゲーテなどの古典主義を頂点とするかたちで進歩史観を構想したり、後の時代につながるものを残したのは文学論争のどちらの側なのかという視点で時代推移の物語を考え

たりしてきたように思われる。しかし、それは後の時代があとから上書きするかたちで啓蒙主義に与えた物語であって、当時の両陣営の当事者にはそれぞれが抱く時代推移の物語があったということを本稿では確認しておきたい。

-
- ¹ 1732年から1744年まで刊行された『ドイツの言語、詩作、雄弁の批判的叙述のための論叢 (Die Beyträge zur critischen Historie der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit)』(以下、『批判的論叢』、Beyträge と略記)
- ² Beyträge. Bd.6 (Vier und zwanzigstes Stück). 1740, S.652-668
- ³ ibid, S.668
- ⁴ Johann Jacob Bodmer: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie und dessen Verbindung mit dem Wahrscheinlichen. In einer Vertheidigung des Gedichtes Joh. Miltons "Von dem verlohrnen Paradiese" ; Der beygefüget ist Joseph Addisons Abhandlung von den Schönheiten in demselben Gedichte. 1740
- ⁵ Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.2: 1731-1733, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2008, S.309
- ⁶ Gottsched: Briefwechsel, Bd.2. S.361
- ⁷ Johannes Crüger: Joh. Christoph Gottsched und die Schweizer J.J.Bodmer und J.J.Breitinger. 1882, S.57f.
- ⁸ Beyträge. Bd.6, S.653
- ⁹ ibid.
- ¹⁰ ibid. S.653f.
- ¹¹ ibid. S.655
- ¹² ibid. S.656
- ¹³ ibid. S.656f.
- ¹⁴ a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- ¹⁵ a.a.O. S.657
- ¹⁶ [Johann Jacob Bodmer:] Brief-Wechsel Von der Natur Des Poetischen Geschmacks. Dazu kömmt eine Untersuchung Wie ferne das Erhabene im Trauerspiele Statt und Platz haben könne; Wie auch von der Poetischen Gerechtigkeit. 1736
- ¹⁷ ibid. S.2f.
- ¹⁸ a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- ¹⁹ 便宜的に「国民性」という言い方をしておくが、ドイツやドイツ人という場合、現代の感覚とは違って、ドイツ語圏、ドイツ語圏の者という意味合いで捉えてもらいたい。「祖国」と言う場合も、所属する当該言語圏というニュアンスで理解されたい。
- ²⁰ a.a.O. S.659f.
- ²¹ ibid. S.660
- ²² a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- ²³ a.a.O. S.660f.
- ²⁴ ibid. S.661f.
- ²⁵ ibid. S.662
- ²⁶ a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- ²⁷ a.a.O. S.662f.
- ²⁸ ibid. Vgl. Detlef Döring: Der Literaturstreit zwischen Leipzig und Zürich in der Mitte des 18. Jahrhunderts. In: Anett Lütteken und Barbara Mahlmann-Bauer(Hg.): Bodmer und Breitinger im Netzwerk der europäischen Aufklärung. 2009, S.76
- ²⁹ ibid. S.663f.
- ³⁰ Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.5: 1738-1739, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2011, S.199
- ³¹ a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- ³² a.a.O. S.665
- ³³ ibid. S.665f.
- ³⁴ ibid. S.666
- ³⁵ Vgl. Lucas Marco Gisi: »Ein gerautes Siegel«? Die Bedeutung von Bodmers und Breitingers Rezeption italienischer Poetiken und Poesie für den Literaturstreit mit den »Gottschedianern«. In: Anett Lütteken und Barbara Mahlmann-Bauer(Hg.): Bodmer und Breitinger im Netzwerk der europäischen Aufklärung. 2009, S.105-126

-
- ³⁶ Johann Christoph Gottsched: Versuch einer Critischen Dichtkunst vor die Deutschen. 1730, S.172
- ³⁷ Sieh. Anm.24
- ³⁸ Beyträge. Bd.8 (Dreyßigstes Stück). 1743, S.345f.
- ³⁹ ibid. S.347
- ⁴⁰ [Immanuel Jacob Pyra:] Erweiß, daß die G*ttsch*dianische Sekte den Geschmack verderbe. 1743, S.68;Vgl. Gisi: »Ein gerautes Siegel«?, S.118
- ⁴¹ これ以前に、ゴットシェートがピューラの『アエネーイス』の翻訳を評価せず、シュヴァルツの翻訳を評価した経緯については、拙稿を参照のこと。福田覚「ピューラの『アエネーイス』訳の掲載をめぐって——ゴットシェートとの関係を語る一つの挿話」、『希土』41号、29-57頁。ボードマーとブライティンガーがピューラの側に立ち、ゴットシェート派シュヴァルツを支援したので、この対立を文学論争の前哨戦と見る向きもある。Vgl. Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.7: August 1740-Oktober 1741, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2013, S.XXXIII
- ⁴² Vgl. Gisi: »Ein gerautes Siegel«?, S.116f. ギージーは、ドイツにおける文学論争を、イタリアとフランスの間の詩学的な論争を反映したものであると見ていた。Vgl. ibid. S.124f.
- ⁴³ a.a.O. S.667f.
- ⁴⁴ a.a.O. S.667
- ⁴⁵ Johann Christoph Gottsched: Versuch einer Critischen Dichtkunst. In: Ausgewählte Werke, Bd.VI/3 (Variantenverzeichnis), S.47f. この箇所は文学論争に対する直接的な反応と読める、とシュリーパーも述べている。Vgl. Hendrik Schlieper: „Ich gedenke dieses trefflichen Buches mit Fleiß allhier“. Cervantes' *Don Quijote*, der Roman und das Wunderbare in Gottscheds *Critischer Dichtkunst*. In: Leonie Süwoloto u. Hendrik Schlieper(Hg.): Johann Christoph Gottscheds *Versuch einer Critischen Dichtkunst* im europäischen Kontext, S.78

本論文は、2021年度－25年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(C)「ドイツ啓蒙主義詩学史の再記述－模倣・想像・情念の複合性をめぐる概念史として」(課題番号 21K00435)による研究成果の一部である。

対話小説への道

—— J・J・エンゲルの理論と実践 ——

廣川 智貴

はじめに

小説とは何かと問われれば、はたしてどのように答えるだろうか。おそらく、それぞれの読書経験に応じて、多種多様な回答が可能だろう。だが一般的なイメージというものもあるにちがいない。卑近な例で恐縮なのだが、たとえば、現代文の教科書や大学受験参考書がそうしたイメージを知るうえでよい例を提供してくれるように思われる。このような書物の小説に関連する箇所を目をやると、われわれはしばしば作中人物の心情に関わる問いを目にする。つまり、小説には人物の心理が描かれているということが、いわば暗黙の了解となっているのである。

ドイツ文学がとりわけこうした心理描写に注目するようになったのは 18 世紀後半のことであった。この意味で画期的に思われるのは 1774 年である。というのもそれは、主人公の内面を赤裸々に表現したヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』が出版された年であり、小説における心理描写に重きを置いた大部の理論書であるフリードリヒ・フォン・ブランケンブルクの『小説試論』が世に出た年だったからである¹。これらふたつの作品が同じ時期にあらわれたのはおそらく偶然ではない。というのも、津田保夫も指摘しているように、身体と精神の関係について考察する「人間学」の影響から、小説においても人間の心理的側面に光があてられはじめたからである²。

本稿で取り上げるヨハン・ヤーコプ・エンゲル (1741-1802 年) は、このような作中人物の心理描写を重視する小説という試みに寄与したひとりであった。今ではほとんど忘れられている存在なのだが、存命中はレッシングとならび称された作家でもあった³。たとえば、ハインリヒ・ハイネはその著『ドイツの宗教と哲学』において、メンデルスゾーン、ズルツァー、ガルヴェ、モーリッツなどとならぶベルリン啓蒙主義を代表する人物としてエンゲルの名を挙げている⁴。エンゲルは『世の中のための哲学者』(1775-1800 年) を編集した通俗哲学者として、また演技論『演技のための理念』(1785/86 年) や国民劇場の支配人として活躍した演劇家として⁵、さらにはフンボルト兄弟や皇太子時代のフリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世に個人教授をおこなった優れた教師として同時代に影響を及ぼした。そうした彼の一連の仕事のなかで、小説の発展にとって興味深いのは、『若きウェルテルの悩み』と『小説試論』と同じ 1774 年に公にされた小論『行為、対話、語りについて』(Über

Handlung, Gespräch und Erzählung、以下『行為』と略す)である。この論文のなかでエンゲルは、文学における「行為」を定義しなおし、その動機を心理と結びつけることで、小説における心理描写への道を拓いたのだった。さらに彼はこうした理論的な考察だけでなく、実際に対話小説 (Dialogroman) を書くことでその表現の可能性を確かめようともした。本論文では、まずは『行為』を手がかりにしてエンゲルの理論を検討し、それをふまえて小説『ローレンツ・シュタルク氏』 (*Herr Lorenz Stark*、雑誌『ホーレン』第4巻 (1795年)、第5巻 (1796年) に一部掲載したのち 1801 年に出版) を概観したい。

1. 『行為』の前史としてのゲスナー批評

本論文の底本はエルンスト・テオドール・フォスによる編集版である。この書物の構成はよくできており、『行為』第1稿のテキストだけでなく、この論文の理解に必要と思われるエンゲルの別のテキストもあわせて収録されている。これら一連のテキストのなかでもとくに言及しておきたいのは、エンゲルがザロモン・ゲスナーの『新しい田園詩』 (*Neue Idylle*) を書評したものである。これは『行為』の前年である 1773 年に発表され、おそらくは若きゲーテによる牧歌の批評を契機として書かれたものである。ゲーテはその批評においてゲスナーの牧歌の表現を次のように痛烈に批判している。

だがそれは文学の経験をおおいに欠いたものではないだろうか？ これらの牧歌のどの箇所においても、行為する人々が互いへの本当の関心を持っていないのだから。それは語りによる冷たいモノローグのようなものである (…)⁶。

エンゲルは「このすぐれたゲスナーについてわれわれは、すでに一度ならずこのように言われるのを耳にしてきた」と前置きし、またおそらくはゲーテの上述した批評を意識しながら、牧歌に向けられる否定的な声を以下のようにまとめている。

この男は描写する (malend) 詩人にすぎない！ 彼の偉大な才能は生気をなくした自然を描写するだけなのだ！ この詩人が風景をかざる人間ときたら、実際の人間などではない！ そのような人間を導入するやり方はきわめて冷酷で弱々しい！ ほとんど対話といったものがなく、つねに語っているだけなのだ！ (119)

だが、われわれは「ゲスナーは一般に言われているような描写する詩人なのだろうか？」と問うてもよいのではないか。たしかに彼は自然を描写してはいる。しかしその「主要目的」はただ単に「生気ない自然、あるいはいきいきした自然をたよりにして外的な形を描写すること」ではない。つまり、エンゲルに言わせれば、一般に批判の的となっている描

写は、それ自体が目的なのではなく、あくまでも「それがこれらの行為（Handlung）や感情（Empfindung）に影響を及ぼすかぎり」（119）においておこなわれているものなのである。このようにエンゲルは、「描写」を「行為」と結びつけることで、ゲスナーを一般的な批判から救済しようとするのである。

このゲスナー書評においてすでに「行為」概念が登場していることは注目に値するが、さらに『行為』のタイトルにもある「対話」と「語り」という形式に触れられていることも重要であろう。先述したゲーテの批評からもうかがわれるように、人々は「彼〔＝ゲスナー〕が人物を導入するやり方を、彼の詩的才能の欠如を具体的に証明するものだと考えている」、とエンゲルは言う。さらに彼は、そうした人々には「独白や物語ではなく、対話、それもじつに迅速で熱烈な対話を持とうとする」（128）傾向があるようだ、と指摘する。そこでエンゲルは、ゲスナーが牧歌のなかで行為や状況を描写するにあたり、もしも読者が望むような対話形式を使用すればどうなるであろうかと思いをめぐらせる。その結論は単純明快である。そこからは何も生じないというのが彼の見解である。たとえば、人間については「論文でも、物語でも、演劇でも述べることができる」（128）。これらの分野で優れた業績を残したディドロは論文形式で人間を語ったのだった。エンゲルに言わせれば、彼がこの形式を選択したのであれば、読者にもそれが気に入るはずなのだ。もちろん、もしも他の形式で述べていたならば、と望むことはできるだろうが、私たちが「知らなければならないのは、どのような種類の陳述もそれ独自の完成度をもつということ」（128）なのである。

このようにエンゲルは作家が選択した形式それ自体を評価するよう読者に勧めるのだが、加えて形式と対象との関係についても述べている。「どの陳述もそれ独自の完成度をもつだけでなく、別の種類ではそれほど際立つことのないような独自の対象をもっている」（128）と言われているように、それぞれの陳述の形式にはそれに適した対象があるというのである。この意味で、「すべてを対話化しなければならない劇作家」は不利であり、かなり制限された対象を扱うことになるだろう。他方で、「この点で望みうるあらゆる自由を有している叙事詩人や小説家」（128）は、それだけに多様な対象を扱うことができるだろう。いずれにせよ作家は対象にふさわしい形式を選ぶことにも配慮しなければならないのである。

こうした考えをエンゲルは具体的にゲスナーの作品で検証している。たとえば彼は、『新しい田園詩』に収められ、散文で書かれた「ミュコン」を取り上げ、これが対話として表現されたらどうなるだろうかと問う。この作品には、「神に生贄を捧げようとアポロの神殿へと赴くふたりのさすらい人」（129）が登場する。彼らは真昼の暑さに耐え、今にも干からびそうなのだが、そうした描写には対話はふさわしくない、とエンゲルは断言する。というのも、「ふたりのさすらい人はただ単調なものを感じることができただけ」（129）だからである。そうした気持ちをだらだらと作中人物に語らせるよりも、語り手が「単純に語る方がはるかによかろう」（129）とエンゲルは続けて言う。

さらにエンゲルは『新しい田園詩』に収められたごく短い作品「テュルシス」にも言及

している。ここにみられるコメントはごく簡単なものなのだが、その内容は後の『行為』にも通じるように思われる。テュルシスと少女との淡い恋が描かれるこの作品について、エンゲルはこう述べている。

たとえば、牧歌「テュルシス」にみられる内気で臆病な愛のように、情熱の性質がたいていはため息、姿勢、パントマイムによってのみ表わされるとすれば、詩人はこのため息、姿勢、パントマイムを語ることにしかできない。せいぜいのところ、情熱の性質がなお許容するような、とぎれとぎれの談話（Rede）をあちこちに挿入することしかできない。（128 強調は引用者による）

ここで注目したいのは、人間の心理を再現して語ることでしか伝えられないという、いわば語り手の限界が告白されている一方で、そうした真理は散文においても「談話」で表現できるという可能性にふれられていることである。つまりエンゲルはゲスナー批評において、「描写」と「行為」を結びつけてこの牧歌詩人を救済するだけでなく、散文における「語り」と「対話」という形式の相互作用についても示唆しているのである。

2. 「行為」（Handlung）概念について

シュテファン・トラッペンは、アリストテレスによる「あらゆる種類の詩は模倣である」というミメシスの定義が、ドイツ啓蒙主義詩学においていわば権威として機能していたが、他方で欠点も有していたことを指摘している。一言で言えば、「ミメシス」や「イミタツィオ」がいったい何を意味しているのかが不明瞭だというのである。そうしたなかで、こうした議論を前進させたものとして、トラッペンは「レッシングの『ラオコオン』を極地とする詩と絵画の関係についての考察」、「観客が悲劇的对象に満足を感じる理由」についての考察、「文学の領域における行為（Handlung）の意義の考察」を挙げている⁷。エンゲルの『行為』は、そのタイトルから明らかなように、この最後の「行為」に関する考察に重きを置くものである。

この「行為」という概念について、啓蒙主義期の詩学、いやそれどころか今日に至るまで大きな影響を及ぼし続けているのは、言うまでもなくレッシングの『ラオコオン』（1766年）であろう。小田部胤久も指摘するように、当時の詩学においては、ホラティウスの「詩は絵のように」という言葉が「詩と絵画の類似性を要請する一種の命法」⁸として人口に膾炙しており、それゆえにこれらふたつのジャンルの境界はきわめて不明瞭なままであった。そうしたなかであって、レッシングによるこの理論的著作は、詩と絵画が使用する記号およびその対象を明確にすることで、これらのジャンルの境界を確定しようとした野心的な試みであった。

レッシングによると、絵画は並列的記号を使用し、詩は継起的記号を用いるので、その対象もおのずとこれらの記号の性質によって規定されるという。あまりにも有名な箇所だが、エンゲルの『行為』にとっても重要なので引用しておこう。

並存する対象、あるいはその諸部分が並存するところの対象は物体 (Körper) と呼ばれる。したがって、目に見える諸性質をそなえた物体こそ絵画本来の対象である。

継起する対象、あるいはその諸部分が継起するところの対象は一般に行為 (Handlung) と呼ばれる。したがって行為こそは、文学本来の対象である⁹。

要するに、並列的記号を使用する絵画は並列的对象としての物体を、継起的記号を用いる詩は継起的対象である行為を表現すべきだ、というのがレッシングの主張である。

エンゲルは『行為』においてレッシングを「私の知るなかでもっとも鋭い芸術批評家」(17) と呼んでいる。このように彼はレッシングを批評家としてきわめて高く評価していた。だがそれは、エンゲルがこの偉大な批評家の仕事を無批判に受容したということの意味しない。むしろ優れた先人を批判的に乗り越えようとするのがエンゲルの方法だった¹⁰。そこでここでは、この両者の相違点が際立っているように思われる「描写」と「行為」の定義を手がかりにして、話を進めることにしよう。

エンゲルは彼の詩学における基本概念のひとつである「素材」(Materie) を「描写」(Beschreibung) と「行為」(Handlung) に分類している。これは先述したところの『ラオコオン』にみられる中心的論点を想起させる。だが、ハンス＝ゲルハルト・ヴィンターも指摘しているように、エンゲルがレッシングとは異なってこれらふたつのものを「並列的な出来事」にも「継起的な出来事」にもともにあてはまると考えていたことは注目に値する¹¹。つまりエンゲルにあって「並列」と「継起」は、その境界を失ってしまうのである。この点に深く関わっているのが、エンゲルによる「行為」と「出来事」の区別である。

『行為』の冒頭でエンゲルは、「事物の状態」の扱い方には二種類あると述べている。すなわち、「ある事物のそれぞれの状態」は、「それ [= 状態] がもたらされた原因を先行する一連の状態のうちにもっている」ものである。そしてその取り扱いは、「その状態が由来するところの原因を顧慮せずにそれ [= 状態] をあるがままに扱う」か、「この原因を顧慮するかにかかっている」という。したがって、「事物の状態」については、「その事物の状態はどのようなものであるのか」という問いと「いかにしてそのような状態に至ったのか」

(6) という問いを立てることができる。結論を先に言えば、前者が「描写」の対象であり、後者が「行為」の対象というわけである。

抽象的な議論をあまり好まないエンゲルは、こうした「事物」の取り扱いの相違を明らかにするために、歴史編纂者を例として挙げている。エンゲルは詩人が出来事の背後にある「秘かな動機」を発見する方法を当時の歴史学にちなんで「実用的 (pragmatisch)」(12) と呼んだ。啓蒙主義期の歴史家たちがこの概念のもとで理解していたのは、「歴史的出来事

の因果関係の解明」であった¹²。こうした意味での「非実用的な歴史編纂者」は、「悪名高いクロムウェルを人生のすべての場面で登場させて私たちに示すだろう」、とエンゲルは言う。すなわちこうした歴史家は、「どのように彼〔＝クロムウェル〕がまずはただの私人から軍の将校となり、ついでその上級指揮官となり、それから議会の支配的な主人となった」(9)のかといった客観的情報を次々と挙げるだろう。しかし、ただの私人にすぎなかったクロムウェルが、なぜそれほどまでに「強力な支配者」(9)になったのかは教えてくれない。要するに、この種の歴史編纂者は、「内的・外的状態のきわめて連関のある連なりを、貧弱でもぎ取られたただの出来事の連続へと変えてしまう」(10)のである。他方で「実用的な歴史編纂者」は、「秘かな原動力を明らかにする」(12)だろう。彼は一方でクロムウェルの性格を、他方で当時のイギリスの社会状況を考慮し、クロムウェルの意図から意図への移行を明らかにするにちがいない。つまりここでは、ただの「記述 (Beschreibung)」から本当の歴史 (Geschichte) が生じる」(12) というのである。

こうした検討をふまえて、エンゲルは文学における「行為」へと話を移し、「以下に述べることほど、この語を正確にまた実りあるように説明することはできないと思う」(15)と前置きしたうえで、この主要概念を以下のように定義する。

ある詩のなかで「行為 (Handlung)」が存在するのは、そこで私たちがある「意図をもって作用する」ような「ある人物の活動による変化」が生成 (werden) するのを目にすると、あるいはそのかぎりにおいてなのである。(15)

この引用が端的に示しているように、エンゲルにとっての「行為」とは、何よりも「意図」によって「生成」される「人間の行為」¹³であった。それゆえに彼は、「あらゆる行為の本来の場は考えたり感じたりする心 (Seele) なのである」(25) とも言うのである。ところで、今日のスタンダードのひとつであるゲーロ・フォン・ヴィルペルトの文学用語事典にみられる「行為」(Handlung)の項目も、エンゲルによる「行為」概念の定義を想起させる。ヴィルペルトによると「行為」とは、

心の内部の意志表明を行為へと置き換えることであり、実用的 (pragmatisch) ジャンルの内容・構造要素の中心をなす。また、叙事文学においては主要人物やそれに対抗する人物の行動によって方向づけられる事件の経過、とくに劇作品においては紛争の不可欠な原因である¹⁴。(強調は引用者による)

要するに、エンゲルの「行為」概念とは、単なる時間的な継起を意味するだけでなく、このような心理的な側面を持つものであり、現在の「行為」概念の定義にも連なるものなのである。

3. 「対話」と「物語」という形式について

これまでわれわれは、エンゲル詩学の「描写」と「行為」を検討し、とりわけ後者が彼の詩学にとって重要であることを確認してきた。そこで次に問題となるのが、そうした「素材」をいったいどのような「形式」で表現するかということである。すでにタイトルにも端的に示されているように、この点でエンゲルにとって重要なのは「語り」と「対話」であった。

エンゲルをこうした形式の考察へと促した動機のひとつは、ヨハン・ゲオルク・ズルツァーへの不満であった。たとえば、1773年に盟友クリスティアン・ガルヴェに宛てた手紙において、エンゲルは次のように語っている。

私は対話 (Dialog) についての見解をかなり集めました。それらを小論に活かそうと思っているのです。ヴァイセは『叢書』(*Neue Bibliothek der schönen Wissenschaften und freyen Künste* を指す) のための論文を私に求めておりまして、復活祭の頃までには仕上げなければなりません。このテーマはかなり新しくかつ重要でしょう。(…) ズルツァーは彼自身の事典に「対話」(Gespräch) の項目を設けています。しかしそこで言われていることは、私にはあまりにも当たり前であるように思われるのです。ですから、それについて繰り返し述べることは、労に値するとは思いません。ズルツァーは解説と二三の一般的なコメントを付しているのですが、ほんのわずかも特殊なものに立ち入ることはないのです¹⁵。

手紙の書かれた時期からして、ここで言及されている「小論」とは『行為』のことであろう。エンゲルはズルツァーの記述に「対話」の具体的な検討が欠けていることを指摘し、みずからこの「小論」を書くことで、その欠を補おうとするのである。

それではエンゲルはどのようにしてズルツァーの考えを補足しようとするのだろうか。「ある事柄の性質」は「それと対立する事物との比較をとおしてのみ認識される」(55) と考えるエンゲルは、「語り」と「対話」というふたつの形式に着目し、それらを比較することでそれぞれの特徴をあきらかにしようとする。複数のものを比較するにはいわゆる「比較の第三項」が必要だが、エンゲルは時間をそうした項目として設定して比較を試みる。エンゲルによれば、「語り」とは過去という歴史的な観点から解釈できるものであり、他方で「対話」の性質は「直接的な現在」にこそあるという。そうして得られた分類の結果を、エンゲルは「行為」概念と関連させて以下のように述べている。

「語りにおいては行為 (Handlung) はすでに起こってしまっている」。また「対話において行為はまさにいま眼前の瞬間に起こっている」。前者においては、聞き手を考慮し、自分が語ることにについてある種の目的をもっている証人が、それに関連する情報を提

供する。劇においては、私たちはいわば偶然にあらわれ、語る人物は自分自身に関する証言以外のことをまったく知らない。自分自身が互いに主張しようとする意図以外のことをまったく知らないのである。(55f.)

このようにエンゲルは、「語り」を過去に、「対話」を現在に位置づけ、さらにこうした基本的な相違から、「何よりも重要な第二の区別」を導き出す。すなわち彼は、「物語は行為する人物 (Seele) のそのつどの状態について、またそれに先行するあらゆる変化の正確な全体の連関について、特殊で、明確で、完全な観念を、対話ほどには与えることはできない」(57) と断言するのである。すでに述べたように、エンゲルは「行為」を「生成」と関連づけていたが、この点からみても「対話」はそのつどの変化を表現するのに適した方法であるように思われたのである。

エンゲルはこの「第二の区別」からさらなる命題を導いている。「対話においては、物語におけるよりも、はるかに多くの行為 (Handlung) が可能である」(70)。エンゲル自身も少し抽象的だと思ったのか、こうした命題の提示に続けて、文学作品の創作という観点から具体的に以下のように説明を加えている。

人物の描写については、物語形式よりも対話形式の方がはるかにすぐれているということである。前者の形式は心の状態については常に一般的な概念しか与えないので、行動する人物が登場人物であるところでも、人物の一般的部類以上のものを述べることができない。それに対して後者は、この人物を全体的で繊細な混合において、あらゆる独自の明暗で特殊なものに至るまで、そして望みさえすればポートレートとしてわれわれに描写することができるのである。(70)

このようにエンゲルは、対話がすぐれて「人物の描写」を、つまりキャラクターを表現するのに適する一方で、物語は「一般的な概念」を提示するにとどまると考えるのである。

エンゲルはドイツ語の特性もこうした「対話」の機能に有利に働くと考えた。というのも、「われわれの言語」であるドイツ語は、「きわめて感情のこもった力強い対話をおこなうための、実にすばらしい資質を備えている」からである。もっとも彼は「われわれのところでは、このジャンルについて他の国民に比べてますますよいものが少なくなってゆくのではないか」と危惧してもいる。ドイツ語のように多様な観念の表現が可能な言語にあっては、それだけに「対象をきわめて繊細なニュアンスに応じて現前化させる技術の心得、および比較的にいきいきとしたあたたかな想像力が作家には求められる」(59) からである。つまり作家には「独自の心の状態へと押し入るようなより偉大な才能が求められている」(59f.) のである。

翻ってみれば、「対話」と心理との関連を指摘したのは、何もエンゲルが最初というわけではない。すでにクリスティアン・トマジウスは、対話をとおして心の中を覗くことがで

きると考え、対話による情動（Affekt）の観察を強調していた。また、『行為』において言及されているズルツァーも、対話の利点について以下のように述べている。

人間の内奥を見抜く最善の機会、その人が声に出して考えるのを、気づかれないようにして聞くことだと考えねばならないだろう。だがさらにより手段がある。すなわち、その人がなんら用心することなく、他人と話をしているのを聞くことである。というのも、この他人は、反論やら励ますなどして、あるいはその考え方をとおして、よりいきいきと明確に自己を表現し、その心全体をさらに展開する機会を与えるからである。（…）それゆえに対話（Gespräch）とは、考え方や感じ方をお互いに展開しあう人々の話し合いを模倣したものなのである。¹⁶

このように、すでにエンゲル以前にも「対話」と心理の結びつきを指摘した人はいたのだが、こうした一般的な議論をふまえつつも、それを「行為」という概念に関連させ、さらに小説という新しいジャンルにおいて「対話」を応用しようとしたところにエンゲルの独自性があったと言えよう。

4. 対話小説『ローレンツ・シュタルク氏』

われわれはこれまでのところで、エンゲルが「行為」という概念を心理的に解釈し直し、その表現には「語り」よりも「対話」という形式が適しているということを確認した。ただ、エンゲルにおける一連の議論を追うなかで興味深く思われるのは、彼が『行為』の冒頭においてすでに、ふたつの形式の混合の可能性を念頭においていることである。

たとえば、物語と対話は、物語であり対話のままである。だがこれらはそれ自身のジャンルにおいてあらわれるか、別のジャンルの作品においてあらわれるかで、まったく別の色彩やまったく異なるトーン（Ton）を得る。つまりそれらは、叙事的作品であらわれるか、劇的作品であらわれるか、それとも叙情的作品であらわれるかによって異なるのである。（5f. 強調は引用者による）

ここでエンゲルは、「物語」形式なら小説、「対話」形式なら戯曲に属するといった単純な対応関係だけでなく、それぞれの形式が他のジャンルでも使用される可能性を示唆している。たしかにエンゲルはそれぞれの表現方法の利点を認めてはいる。彼は「対話」の方が「物語」よりも「行為」をうまく表現できると評価する一方で、他方では「物語」には「時に大きな、時に小さな跳躍をおこなう自由」（71）があると述べているからである。もしも重要なことが何も起こらず、本質的な意味で「行為」に属するものでなければ、「大きな時

間」を省略して語ることができるだろう。こうしたそれぞれの利点を活かすために、エンゲルは「対話」と「物語」とを混合しようとするのである。

むろんこのことは、それぞれの形式がどのジャンルでも勝手気ままに使用できるということの意味するのではない。各形式は他のジャンルで使用されれば、本来のジャンルで使用されるのとは異なる「トーン」を獲得する。エンゲルによると、「戯曲のトーン」とは「単純で急ぐ」ものであり、「叙事的なトーン」とは「豊かで発展させる」(43) ものだという。つまり、「それぞれの文芸の性質は、作品に主要なトーンを与えているあれこれの混合に応じて、少しは違ったものとなるのである」(43f.)。

エンゲルはこうしたいわばジャンルの混合の例をいくつか挙げている。たとえば、「偶然に対話の形式をした議論」の例として、クセノポンの『ヒエロン』が挙げられている。この作品においてシモーニデースは、君主と私人ではどちらが幸福かを知ろうとする。シュラクサイの専制君主 [= ヒエロン] ほどこの問いに答えるにふさわしい者はいないように彼には思われる。君主となる前は私人であったヒエロンなら、ふたつの身分のあり方を比較できるからだ。彼らの間のやり取りは一見「対話」のようである。だが、「われわれの眼前に提示される各場面において、一歩ずつあらゆる瞬間を通して行為を追う」(74) こと、つまり「生成」の表現が「対話」であるとするならば、ここでの対話はその意味での「対話」とは言い難い。彼が語るのは「かつての熟考によって、かつての心の行為によって発見されたもの」(39)、つまり過去に属するものと言えるからである。「対話」の形を装いつつも、実際のところのはかつての行為を報告しているにすぎない。語り手は「対話」を使用してもやはり過去から逃れることはできないのだが、そこから物語における「対話」のもたらす独自の「トーン」が生じると言えよう。

エンゲルはこのように言わばジャンルの混合を考えるのだが¹⁷、この問題を検討するにあたってわれわれの関心を惹くのは、彼が理論的な考察だけでなく、そこで得られた成果を実際の作品において試そうとしていることである。対話小説『ローレンツ・シュタルク氏』がそれである¹⁸。この作品の主題は、道徳に厳しいドイツ的な父親とその父に誤解された息子との世代間の争いというありふれたものである。

注目したいのはこの作品の成立過程である。というのも、この小説はそもそも喜劇『ドイツの家長』として構想されていたからである。着想はエンゲルがライプチヒで学生生活を送っていた時期にまでさかのぼる。同じくライプチヒで学んでいたゲーテとは、素人芝居でレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』を演じたこともあったようだが、いずれにせよこうした多感な時期に『ドイツの家長』は構想され、1776年には3幕が書き上げられたという¹⁹。だがこの喜劇は最終的には小説の形をとることになった。こうした成立の背景はエンゲルの周辺にも知られていたようである。たとえば、『ローレンツ・シュタルク氏』が連載された雑誌『ホーレン』を編集したシラーは、「フンボルトが私に書いてよこしたように、『ローレンツ・シュタルク氏』はかつて喜劇になるはずだったのですが、偶然にも物語形式になりました」²⁰（強調は引用者による）とゲーテに伝えているし、『ロー

レンツ・シュタルク氏』の当時の書評にも、「書評者がたしかな筋から知るところによれば、そもそもこの物語の素材は、戯曲のために定められたものであった。今は亡き著者は『ドイツの家長』というタイトルでそれを構想していたのである」²¹と記されている。

だが、シラーがここで言っているように、『ローレンツ・シュタルク氏』がはたして「偶然にも」小説になったのかどうかは疑わしいように思われる。というのも、『ローレンツ・シュタルク氏』には、戯曲の名残と思われる要素が偶然にしてはあまりにも散見されるからだ。たとえば、第7章の冒頭「シュタルク氏はザクセン、ブランデンブルク、ハノーヴァー、ブラウンシュヴァイクの三分の二ターラーでいっぱいの机の前に座っていた」²²や、これに続く第8章の冒頭「シュタルク夫人はすでに少しのあいだ自分の部署に立っていたのだが、ようやく会話がよからぬ方へと向かっていることに気づき、こちらに入ってきた」²³などは、あたかも戯曲のト書きをそのまま小説に取り入れたような印象を与える。さらには、「偶然にも」小説になったと述べていたシラーも、エンゲルの原稿を受けとった頃にゲーテに宛てた手紙において、この小説に戯曲に不可欠な「対話」の要素が見られることを的確に指摘しているのである。「数日前、エンゲルも私に三全紙を超える原稿を寄こしました。それは一般読者にはふさわしい内容のもので、一部は対話で、一部は物語で書かれているものです」²⁴（強調は引用者による）。『ローレンツ・シュタルク氏』の成立に先立って、「行為」、「対話」、「物語」の問題を詳細に検討していたエンゲルのことである。戯曲から小説へというこの改作は、小説において戯曲の「具象性」²⁵を求めようとする試みであったように思われる。

当初『ホーレン』に連載された『ローレンツ・シュタルク氏』は、こうした劇的な要素が功を奏したのか、読者にも好意的に受け入れられたようである。たとえば当時の書評でも、「活気や具体的な効果を少なからず得る」²⁶とところの物語の対話構造が強調されている。また、フリードリヒ・シュレーゲルも、たとえ「描写された二三の人物、とくに息子が(…)少し観察するだけで好意的な気持を」もたらさなかったとはいえ、作品にみられる「劇的な具象性と繊細な性格描写」²⁷を評価したのだった。エンゲルの意図は見事に実現され、『ローレンツ・シュタルク氏』によって対話小説というジャンルの可能性も開かれるように思われた。だがこの好景気は長くは続かない。早くも1798年にはその同じシュレーゲルが、エンゲルの「無価値なものを扱い、飾りたてる術を心得ている態度」²⁸を嘲笑しているからである。このシュレーゲルの評価が象徴するように、エンゲルはその後いわゆるヴァイマル古典主義や初期ロマン派の作家たちによって酷評され、人々の記憶からは忘れられてゆくことになる。しかしそれでも、『ローレンツ・シュタルク氏』は、1774年に始まるドイツ小説の心理化の過程を検討するうえで、決して無視することのできない作品であるように思われる。

おわりに

今日、われわれは作中人物の心理が描写され、それを追うのが当たり前であるかのように小説を読んでいる。周知のように、今日に至るまでに内的独白や体験話法といった、小説における心理描写の技法には磨きがかけられてきた。そうした技法に親しんでいるわれわれからすれば、全知の語り手を前提とするエンゲルの議論をいま取り上げるのは、時代遅れも甚だしいと思われるかもしれない。だがそれにもかかわらず、「行為」という概念を心理という側面から再定義し、その表現の可能性を考察したエンゲルは、しばしば言及されるブランケンブルクとともに、小説の心理化の礎を築いたと言える。たしかにエンゲルは、シュレーゲルの評価が示しているように、後の世代によって厳しい批判にさらされ、人々の記憶から失われていった。だがそうした批判の激しさは、むしろエンゲルの存在が当時の作家たちにとってどれほど大きかったかを物語っているとも言えよう。エンゲルのようないわゆる通俗哲学者・作家たちの仕事がなければ、ゲーテやシラーによるヴァイマル古典主義、そしてロマン主義という大輪もあれほどまでには開かなかったかもしれない。

本稿では、紙幅のこともあり、『ローレンツ・シュタルク氏』を十分に分析することができなかった。また、『行為』で基本的な理論的考察を終えたエンゲルは、モーゼス・メンデルスゾーンなどの刺激を受け、さらに『文芸ジャンル理論の最初の基盤』（1783 年）において文芸理論を展開するのだが²⁹、これらについては他日を期することにしたい。

使用テキストは以下のとおりである。前者のテキストからの引用は、本文中にページ数のみを記した。

Engel, Johann Jakob: *Über Handlung, Gespräch und Erzählung*. Hg. von Ernst Theodor Voss. Stuttgart 1964.

Engel, Johann Jakob: *Herr Lorenz Stark. Ein Charaktergemälde*. Hg. von Alexander Košenina. St. Ingbert 1991.

参考文献

Becker, Eva D.: *Der deutsche Roman um 1780*. Stuttgart 1964.

Blatter, Christoph: *Johann Jakob Engel (1741-1802). Wegbereiter der modernen Erzählkunst*. Bern 1993.

Gesse, Sven: „Genera mixta“. *Studien zur Poetik der Gattungsmischung zwischen Aufklärung und Klassik-Romantik*. Würzburg 1997.

Hahl, Werner: *Reflexion und Erzählung. Ein Problem der Romantheorie von der Spätaufklärung bis*

- zum programmatischen Realismus. Stuttgart 1971.
- Heine, Heinrich: Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland. In: ders.: Sämtliche Schriften. Hg. von Klaus Briegleb. 2. Aufl. München 1978, Bd. 3.
- Lockemann, Wolfgang: Die Entstehung des Erzählproblems. Untersuchungen zur deutschen Dichtungstheorie im 17. und 18. Jahrhundert. Meisenheim am Glan 1963.
- Scherpe, Klaus R.: Gattungspoetik im 18. Jahrhundert. Historische Entwicklung von Gottsched bis Herder. Stuttgart 1968.
- Schlegel, Friedrich: Kritische Ausgabe. Hg. von Ernst Behler. Abt. 1, Bd. 2. München/Paderborn/Wien 1967.
- Schmitz-Emans, Monika; Lindemann, Uwe; Schmeling, Manfred (Hg.): Poetiken. Autoren – Texte – Begriffe. Berlin 2009.
- Seidel, Sarah: Der Dialog(roman) als anthropologische und poetologische Erzählform der Spätaufklärung – Johann Jakob Engel und August Gottlieb Meißner. In: Gunhild Berg (Hg.): Wissenstexturen. Literarische Gattungen als Organisationsformen von Wissen. Frankfurt am Main 2014, S. 207-225.
- Sulzer, Johann Georg: (Art.) Gespräch. In: *Allgemeine Theorie der Schönen Künste*. Bd. 1. Leipzig 1771, S. 473-476.
- Trappen, Stefan: Gattungspoetik. Studien zur Poetik des 16. bis 19. Jahrhunderts und zur Geschichte der triadischen Gattungslehre. Heidelberg 1998.
- Trappen, Stefan: Handlungsbegriff und Literaturbegriff bei Johann Jakob Engel. Ein Beitrag zur Poetik der Aufklärung. In: Alexander Košenina (Hg.): Johann Jakob Engel (1741-1802). Philosoph für die Welt, Ästhetiker und Dichter. Hannover-Laatzten 2005, S. 123-136.
- Wilpert, Gero von: Sachwörterbuch der Literatur. 8., verbesserte und erweiterte Aufl. Stuttgart 2001.
- Winter, Hans-Gerhard: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung. Mit einer Analyse von J. J. Engels Gesprächstheorie. Darmstadt 1974.

小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、2009年。

津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』、『言語文化共同研究プロジェクト (2018)』(大阪大学大学院言語文化研究科) (2019)、11-20頁。

フリードリヒ・ニコライ (廣川智貴訳)「ヨハン・ヤーコプ・エンゲルのための追悼文」、『西洋文学研究』(大谷大学西洋文学研究会) 35 (2015)、25-65頁。

廣川智貴「演技術と心理学—J. J. エンゲル『演技のための理念』(1785-86)について—」、『ドイツ文学』(日本独文学会) 144 (2012)、19-33頁。

¹ ブランケンブルクの『小説試論』については、津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク

-
- ク『小説試論』を参照のこと。
- ² 津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』、11 頁以下を参照。
- ³ エンゲルについては、拙訳「ヨハン・ヤーコプ・エンゲルのための追悼文」とそれに付された解説を参照。
- ⁴ Heine: Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, S. 583.
- ⁵ 『演技のための理念』については、拙論「演技術と心理学—J. J. エンゲル『演技のための理念』(1785-86) について—」を参照。
- ⁶ Frankfurter Gelehrte Anzeigen, Nr. 68, den 25. 8. 1772, S. 539.
- ⁷ Trappen: Handlungsbegriff und Literaturbegriff bei Johann Jakob Engel, S. 127.
- ⁸ 小田部胤久『西洋美学史』、117 頁。
- ⁹ レッシング (斎藤栄治訳)『ラオコオン』、岩波文庫、1991 年、198 頁。
- ¹⁰ たとえば、エンゲルの主著『演技のための理念』も、レッシングの演技論を発展させたものと考えられる。
- ¹¹ Winter: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung, S. 122f.
- ¹² Winter: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung, S. 124. Vgl. auch Hahl: Reflexion und Erzählung, S. 43-61.
- ¹³ Lockemann: Die Entstehung des Erzählproblems, S. 188.
- ¹⁴ Wilpert: Sachwörterbuch der Literatur, S. 325.
- ¹⁵ Engel an Christian Garve, 2. Dezember 1773.
- ¹⁶ Sulzer: (Art.) Gespräch, S. 473.
- ¹⁷ ジャンルの混合においてエンゲルが占める位置については以下を参照。Scherpe: Gattungspoetik im 18. Jahrhundert, S. 159-168.
- ¹⁸ エンゲルの対話小説については以下を参照。Seidel: Der Dialog(roman) als anthropologische und poetologische Erzählform der Spätaufklärung.
- ¹⁹ Vgl. Engel: Herr Lorenz Stark, S. 101.
- ²⁰ Schiller an Goethe, 23. Dezember 1795.
- ²¹ Rez. in: Neue allgemeine deutsche Bibliothek, 87.1 (1804), S. 190.
- ²² Engel: Herr Lorenz Stark, S. 18.
- ²³ Engel: Herr Lorenz Stark, S. 22.
- ²⁴ Schiller an Goethe, 18. September 1795.
- ²⁵ Schmitz-Emans (Hg.): Poetiken, S. 119.
- ²⁶ Rez. in: Neue allgemeine deutsche Bibliothek, 87.1 (1804), S. 191.
- ²⁷ Schlegel: Kritische Ausgabe, S. 9.
- ²⁸ Fr. Schlegel an Schleiermacher, Mitte August 1798.
- ²⁹ エンゲル詩学におけるメンデルスゾーンの影響については、Trappen: Gattungspoetik, S. 140-172 および Gesse: „Genera mixta“, S. 35-59 を参照。

野生児をめぐる18世紀の緒言説 1

一言説の付置の確認ー

吉田 耕太郎

はじめに

「彼の様子やすべての動作は、青年の身体の中に、まるで2歳か3歳にも満たない幼児がいるかのようであった。大多数の警官のあいだでは、この男を白痴もしくは狂人とみるか、それとも半野生人 *ein Halbwilder* とみるかという点で意見がわかれた」¹。

これは、19世紀に実在したカスパー・ハウザーという青年、現在の表現を使えば、孤児または長期間にわたって育児放棄された人間についての同時代の記録からの引用である。この記録からわかるのは、カスパー・ハウザーが、青年というべき背格好をしていながら、動作は2、3歳にも満たない子どものようであるという異常性をともなった存在であるということ、周囲の人間はこの対象を理解するために、白痴、狂人、野生人といういくつかのカテゴリを試みていたということである。

本稿は2回にわけて、カスパー・ハウザーをはじめとする野生児、現在の言い方をするならば、保護者や共同体からの通常の育成をなんらかの理由で受けてこなかった子どもを、同時代の言説を映し出すプリズムとして利用し、18世紀前後の子どもをめぐる一連の言説の付置と、それらの言説が、どのような社会的かつ学術的な背景から発せられたものであったのかを明らかにすることを目的とするものである。全体の前半にあたる本論では、野生児をめぐる18世紀の言説の付置を概観することにした。

1. 野生児をめぐる想像力

さきほどカスパー・ハウザーをはじめとする一群の子どもたちの発見例は14世紀から確認されている。彼らは「野生児」、または狼や熊に育てられた子どもとして「狼の子」や「熊の子」という呼称でも呼ばれることがある。マルソンは、『野生児』のなかで、こうした子どもたちを、1344年から1961年までの期間に、53例をリストアップしている。リストアップされた子どもたちに共通して認められているのが、社会から隔絶されていた点である²。

この社会からの隔絶という共通の性格の指摘は重要である。というのも、そもそも野生児や狼の子という呼称自体がある種の文化的なバイアスを背負ったものであるからだ。17世紀に3例もの発見記録が残されているリトアニアの森で保護された熊の子たちが知られているが、そもそも3例とも別の子なのかどうかさえ現在では確かめることはできない。この子どもたちは熊に育てられていたのであるから、人間をみればひっかいたりかみついたりし、草や生肉を食べたという記録がのこされている。こうした行状についての真偽もまた、確かめる術はない。こうした子どもは、むしろ何らかの理由で共同体の周辺へとおいやられてしまった存在であり、日々、食べ物や衣服などの施しを受けながら、なんとか命をつないできたと考えたほうが、今日の私たちの理解にはあっている。社会から隔絶された存在という共通項は、野生児にまつわるステレオタイプをいったん外すことの必要性を私たちに教えてくれるものだ。

とはいえこうした子どもたちが、通常を理解をこえた存在であったことも確かである。クラヴィッターは、カスパー・ハウザーをめぐる言説をあとづける研究のなかで、カスパー・ハウザーをヒエログリフの身体と呼び、言説を作り出す機械と説明している³。クラヴィッターの言葉をいいかえるならば、カスパー・ハウザーは通常の子どもたちとは異なる成育プロセスを経てきた人間であるということで、そのような人間へと成育した理由をめぐる多種多様な言説を生み出す起点のように機能していたことを言い表したものである。

このような一連の野生児の報告に対しては、子どもを驚異として描き出そうとしている傾向があると、同時代においても指摘されていた⁴。ここにグリーンブラットがいうところの驚異の心的メカニズムが働いていると説明することも不可能ではない。野生児は理解をこえた驚異であるからこそ、それを理解するために様々な言説が生み出され、言説による囲い込みがおこなわれたわけだ。

社会との通常の接点を何らかの理由で断たれて育ってきた子どもにまず与えられたのが、狼から乳をもらうロムルスとレムスのイメージをはじめとして、人里離れて暮らしたキリスト教の隠者や、葉でつくられた腰巻きの男性の図象でしられるオヌフリウスのように、森に住み野生の動物と暮らした聖人のイメージであった。または正反対に、悪魔のイメージが与えられることもあった。1531年にザルツブルク近郊のハスベルクの森で発見された森の悪魔⁵はその好例であろう。この人物は、鳥のような後脚と、狼のような前脚をもち赤い皮膚で、人間の顔をした典型的なキメラのイメージが付与されている。森の悪魔の元となった、人間がザルツブルク近郊で本当に発見されたのかもしれないが、その記録は人々の想像力に覆い尽くされてしまっているといえるだろう。

同じように1717年にクラーネンベルクで100人の農夫が動員された末に、網でとらえられた18歳程度の女性は、言葉をしゃべることなく、葉、薬草、牛乳だけを口にしていた。ほとんど裸であったが、藁でできた腰巻きのようなものをつけていた。そして彼女の皮膚は黒く厚かった。この女性が、1700年に誘拐された子どもかもしれないという記事が、オランダの新聞に掲載されると、その女性の母親が名乗りでてきた。野生の女性とその母親が再会すると、この野生の

女性は母親に微笑みかけ、涙を落とした。この女性については、アンナ・マリア・ゲンネルトという本名も伝わっている。母親と共に暮らすうちに、アンナの野生性も失われ、その象徴であった黒く厚い皮膚もはえかわったと記録されている。なんらかの理由で親とはぐれ、森にいるところを発見されたのであろうが、保護するために 100 人もの農夫が必要であったのか、なぜ腰巻きを自作しなければならなかったのか、何故皮膚の黒さがことさら強調されているのか。これらは、野生性のイメージを強調するためのレトリックであったともいえるだろう。それは同時に、アンナの人間性の再獲得が、母親との対面時の涙やその後の皮膚の生え変わりによってより効果的に描き出されていたのと同様である。

このような野生児は、18 世紀に入ると、想像力で語られる対象から、調査の対象へとうつってくる。その背後には、人間の知性を学問的に解明しようとする動きに対応したものであった。聖人や悪魔の類比によって語られてきた野生児にむけられた最大の関心事は、神の概念を所有しているかどうかであった。神の被造物である人間であるならば、その知性のうちには神の観念が生得的に植え付けられているはずである。しかし同時に、人間は後天的に知性を獲得し経験的に神の観念を理解する道筋もある。人間の知性の源泉を論じたこの時代の経験論哲学の確証作業の題材となったのが、ハーメルン近郊で保護された野生児ペーターであった。

ペーターはイギリスへと渡り、この哲学上の難問を実証するための実験台となった。ヘルンフート教団のニコラウス・フォン・ツィンツェンドルフもイギリスに渡り、このテストに立ち会ったと伝えられている。ペーターはしばしば学校にも通い、いくつもの方法でもって本を読むことを教えられ、また宗教の原理についての教育が試みられたが、無駄であったと記録されている。「ペーターは何も学ぶことなく、また、彼自身の感情でもって、神についての意識をもっていることを示すことはなかった」⁶。ペーターは人間が生得的に神の観念をもっていることを証明したが、同時に、経験によって観念を獲得することもなかった。この公開試問を機に、ペーターは学問上の表舞台から姿を消すことになる。ペーターの報告を、人間性が回復されなかった野生児の例として解釈することもできるが、病気などの理由から知的な能力を欠いており、育児放棄され、共同体の周辺に追いやられていた例とも解釈が可能である。さらにまた幾度となく教育が試みられたとは言え、ペーターには、正しい教育が試みられなかったのかもしれないと、この報告から推測できる点は多数残されている。

同じように、カスパー・ハウザーにもまた、宗教教育が試みられていた。「彼にとって、宗教は火花にもならず、教義もまたほんの少しもの火薬にならなかった。何人かの牧師が、はやくも彼がニュルンベルクにあらわれた最初の週に、彼のなかに宗教や教義を探し求め、そして宗教へと赴くよう刺激させようと不屈の努力を試みた」⁷。しかしカスパー・ハウザーは宗教については全く理解しなかった。それでもなお彼は、野生児ペーターのように、関心を失うことなく、終始人間として教育がこころみられることになったのも、当時の時代背景が大きなく影響していた。

2. 野生児のタクソミー

まず野生児の分類について確認しておくことにしたい。リンネが、『自然の体系』（初版 1735 年）で、四足歩行の動物と対比させて、サルやナマケモノといっしょに人間をヒト形目 *Anthropomorpha* として分類していたことはよく知られる。リンネは分類の検討を継続し、『自然の体系』（10 版 1758 年）では、霊長目という分類をつくり、その下位にヒト属をもうけ、そこに「ホモ・サピエンス」と「穴居人」という分類をもうけた。穴居人という名称はとても奇妙な印象をうけるが、岡崎勝世は、「存在の連鎖」を念頭に、穴居人を、ヨーロッパには未だ知られていない、人間により近い、高等なサル類のために用意されていたカテゴリーであると論説している⁸。

リンネは、このホモ・サピエンスのなかに、アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人、野生人 *Homo sapiens ferus*、奇形人 *Homo sapiens monstrosus* をおいていた。このような大きな分類体系への関心と並行して、穴居人や野生人といった人間の動物との媒介する中間的な存在への関心は依然として強く残っていたことが知られている。ホモ・サピエンスの下位におかれたこの野生人も安定した分類位置があたえられていたわけではない。山中浩司が指摘するように、リンネが指摘したような野生人は人間と動物の区別、知的能力の先天性や後天性といった議論の渦中にあり、その評価は一定ではなかった⁹。リンネは、人間と動物の中間的な存在の探究に関心が強く残っていたようだ。1760 年にリンネは、弟子のクリスチャン・エマニュエル・ホッピウスに、ヒト形目についての論文をあらためて発表させている。「着飾った貴婦人と森に放置された人間をくらべてみれば、どちらも同じ人間であるとは思えないだろう」¹⁰と生涯を森の動物と過ごした人間を獣人 *Thiermensch* として紹介している。

リンネとホッピウスは、ヘッセンで保護された狼に育てられた子（1344 年）リトアニアの熊に育てられた子（1661 年の発見例）、アイルランドの羊の子（1672 年）、既に言及したハノーヴァー近郊で発見されイギリスで生涯を終えた野生児ペーター（1724 年）を獣人として紹介している。獣人の特徴は、しゃべることができず、振る舞いは粗野で、手と足をつかって移動し、また容易に木に登ることができる。一瞥すれば、彼らが人間よりも動物に近く見えるのは明らかであって、彼らとサルとの本性の区別をみつけることのほうが難しいと結論づけている¹¹。

こうした分類上の手がかりとして、言葉を話すことができない、手と足で移行する、粗野に振る舞うといった外から観察できる概観や振る舞いが活用されていた。例えばチンパンジーを人間とサルの中間の存在であるとしたエドワード・タイソンもまた、双方の表情の相似について言及している¹²。分類するための手がかりそのものが、時代によって異なっていることを、私たちはたえず思い返さなければならない。リンネとホッピウスは、この獣人という人間と動物の中間的な存在を設定することで、「顔も足も、直立歩行も、人間の外形的な構造は、サル類一般と何ら変わっていない」¹³ということ、つまりヒト形目という分類もやはり可能であることを主張していた。

3. 野生児と自然状態

インゲンジープは、ド・ラ・メトリの『人間機械論』が提示した、人間の動物に対する優位を否定する態度、そしてルソーの『人間不平等起源論』での議論を指摘することで、野生児を人間の自然状態と同一視する態度があらわれたことを指摘している¹⁴。確かに『人間機械論』は、ゴリラやポンゴのような大型の動物を野生人と呼ぶ記録を引き合いに出し、そしてまたサルと人間の解剖学的な類似性を持ち出して、聴覚障害者の言語教育を実践していたヨハン・コンラッド・アンマンのもとで訓練を積みばサルも言葉も覚えるはずだと指摘していた¹⁵。そしてまたルソーは、『人間不平等起源論』の冒頭で、人間の自然状態を正しく理解し、その発展をたどることが必要であると述べていることは知られているが、この人間の自然状態を具体的に想起させる役割になったのが、ヘッセンで狼にそだてられた7歳の子ども(1344年発見)、リトアニアの熊の子(1694年、2例目)、ピレネーの双子(1719年)、野生児ペーター(1724年)ら四人の野生児であった¹⁶。

分類の編みの目で捉えるのではなく、歴史的なパースペクティブでもって野生児を理解することで、野生児はこの時代の言説の中であらたな役割をはたすことになった。とりわけ文明史記述でみられるように、近代的な市民社会とそこで実現された文化状態を、仮想的な過去の状態から説き起こす議論の説得力が認められる言説が現れるようになると、野生児は、人間の過去の状態、つまり文明化する以前の自然状態を示す例として位置づけなおされることになった。

とはいえこの自然状態という考え方にも大きなズレがあった。ルソーの自然状態は、後にヘルダーが言語起源論のなかで批判するように、自然の叫びから人間の言葉がうまれたと説く点で、人間を動物に近づけ過ぎたものであった。その一方で、たとえばプーフェンドルフの自然法においては、自然状態は、改善された生活 *zierliches Leben*¹⁷とも、市民状態 *der bürgerliche Stand*とも無縁¹⁸であるものの、しかし知性をもたない野獣たちの生活とも異なる状態であり¹⁹、自然状態の人間は、光 *Erleuchtung* をもって自らの諸行為を理性的 *vernünftig* に導くことのできる存在であった²⁰。

自然状態の人間に一定のモデルを与えることになったイザーク・イゼリンは、自然状態の人間を知性を持ちながらも、それが発揮されていない状態として論じている。つまり文明史とは、人間が動物的な状態から跳ね上がり、ゆっくりであるとはいえ、人間が有している知性が完全性へと発展していくプロセスをたどること²¹、つまり、そのそれぞれの知性の段階で可能となった発明や制度などを記述することであった。野生児ペーターは、知識人の面前で、神の観念の生得性も後天性も明らかにすることがなかったが、その後は農村にてひっそりと暮らすことになった。おなじように宗教は全く理解しなかったものの、カスパー・ハウザーは、人間の文明化のプロセスを再現するために、根気強く教育がほどこされた。その背後には、彼にもまた知性があり、ただそれが発展していないだけであるという人間理解の定着が前提となっている。

この知性を発展させる様々な試みは、子どもを対象とした近代的な教育カリキュラムを支えた思想でもあった。

4. 野生児と言語の起源

「親切なニュルンベルク市民たちの、人間的な関心から、このあわれな若者に送られた物、玩具のひとつひとつで、彼は新しい思考の素材を獲得し、若干の概念そして話し言葉も豊富になった」²²。カスパー・ハウザーは隣人たちの人間的な関心にささえられたサポートにより若干の言葉も覚え、会話もできるようになった。

カスパー・ハウザーをはじめとした野生児の言語の再獲得は、18世紀の言語起源に関する論争のひとつの回答でもあった。言語起源論の最大の争点は、言語の起源は神にあるのか、それとも人間にあるのかという点にあったが、野生児が言語を再獲得し、言語を操ることができるようになるプロセスは、言語を自然状態から自らの力で作り出す例証となった。

先ほど言及したヘルダーは、オラウータンは人間と動物の中間的な存在であるとはいえ、決して言語を作り出すことはできないと、言語能力を、人間と動物とを区別する最大の特徴として擁護していた²³。それゆえリトアニアの熊に育てられた子どもを例にとり、この子どもたちは人間の知性が抑圧されており、言語を使うことができなかつた反自然的な状態におかれていた人間と説明している。ここでも知性の認められない人間を中間的な存在へと分類するのではなく、知性が自然状態においてまだ展開していないだけであったと歴史的なプロセスへの眼差しを確認できる。

匿名で出版されたティーデマンの言語起源論²⁴もまた、ヘルダーと同じように、言語は人間が獲得したものであることを論証するものだが、ティーデマンは、品詞の多様化、文法の複雑さの点から、人間の知性の発展と言語の獲得とをからめて論じている。ティーデマンによれば、むしろ自然状態にある人間は、舌、肺、口蓋は、より活発に動き、叫び声をあげるに適している。そしてこうした状態の知性では、いまだ抽象的な観念は必要なく、「この木」と個物を叫び声によって伝えているだけで十分である。やがて「木」というモノを、他者に伝える必要がでてくると同時に、抽象的な観念が芽生えてくると、叫び声ではなく「木」という言葉を伝えることができるようになる。そして過去の出来事を伝える必要や、未来の出来事について話し合う必要が生じてくると、それに応じて文法も複雑さをましていくというのだ。ティーデマンもまた、野生児の言葉を身に付けるプロセスが、そのまま人間の言語獲得の再現として理解していた。

(以下、次号の論文にて、野生児の言説と、同時代の子どもについての言説との関係を論じることにはしたい。)

-
- ¹ Paul Johann Anselm Feuerbach, *Kaspar Hauser*, Ansbach 1832, S.35.なお翻訳については、西村克彦訳の翻訳を参照した。『カスパー・ハウザー』福武書店 1971。
- ² Jucien Malson, Jean Itard, Octave Mannnoni, *Die wilden Kinder*, Frankfurt 1972, p.42f.
- ³ Arne Klawitter, *Kaspar Hauser als Diskurstopos und Körperfiguration*, in: *Bulletin of the Graduate Division of Letters, Arts and Sciences of Waseda University*, No.62(2017), pp.253-269; pp.255ff.
- ⁴ Vgl. Justus Sincerus, *Urtheil von Bernardi Connors, Evangelio Medici*, in: *Iusti Sinceri Vermischte Neben=Stunden*, 3. St. XIX, Wismar 1724, S.167–170.
- ⁵ P.J. Blumenthal, *Kaspar Hausers Geschwister*, Stuttgart 2018, S.104f.
- ⁶ *Neues vaterländisches Archiv oder Beiträge zur allseitigen Kenntniß des Königreichs Hannover*, Jg. 1825, 6.Bd., Lüneburg 1826, S.282-292; S.290; James Burnett Monboddo, *Ancient Metaphysics*, Vol.3, p.371.
- ⁷ Feuerbach, a.a.O., S.32.
- ⁸ 岡崎勝世「リンネの人間論 — ホモ・サピエンスと穴居人」、『埼玉大学紀要・教養学部』No.41-2(2005), pp.1-63.
- ⁹ 山中浩司「人間の科学—人類学の誕生—」、大林信治、森田敏照編『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房 1994.
- ¹⁰ Carl von Linné, *Auserlesene Abhandlungen aus der Naturgeschichte, Physik und Arzneywissenschaft*, Leipzig 1776, S.58.
- ¹¹ Linné, a.a.O., S.59.
- ¹² タイソンの著作のタイトルをはじめ動物を指し示す単語の混同については以下の研究を参照のこと。Carl Niekerk, *Man and Orangutan in Eighteenth-Century Thinking*, in: *Monatshefte*, 2004, Vol.96, No.4, pp.477-502; pp.480f.
- ¹³ Linné, a.a.O., S.59-60.
- ¹⁴ Hans Werner Ingensiep, *Der aufgeklärte Affe*, in: Jörn Garber, Heinz Thom (Hgg.), *Zwischen Empirisierung und Konstruktionsleistung*, Tübingen 2004. S.31-58; S.33f.
- ¹⁵ ド・ラ・メトリ『人間機械論』岩波文庫 1957, pp.61ff.
- ¹⁶ Jean-Jacques Rousseau, *Politische Schriften*, 1.Th., Berlin 1788, S.151f.
- ¹⁷ Samuel von Pufendorf, *Einleitung zur Sitten- und Stats-Lehre, oder Vorstellung der schuldigen Gebühr aller Menschen, und insonderheit der bürgerlichen Stats-Verwandten*, Leipzig 1691, S.387.
- ¹⁸ Pufendorf, a.a.O., S.388.
- ¹⁹ Pufendorf, a.a.O., S.385.
- ²⁰ Pufendorf, a.a.O., S.392.
- ²¹ Isaak Iselin, *Ueber die Geschichte der Menschheit*, Frankfurt 1764, S.101.
- ²² Feuerbach, a.a.O., S.66.
- ²³ ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（宮谷尚実訳）『言語起源論』講談社学術文庫 2017, p.64.
- ²⁴ Dieterich Tiedemann, *Versuch einer Erklärung des Ursprunges der Sprache*, Riga 1772, S.163ff.

『ドイツ啓蒙主義研究』（1号～18号）掲載論文一覧

第1号（2001年3月）

啓蒙とは何か

－『ベルリン月報』誌上の議論を中心に－（津田保夫）

C.F.ブレーマーの詩学をめぐって

－模倣説の復権と新たな想像力概念の模索－（福田覚）

ケンペル『日本誌』と編者ドーム

－「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに－（中直一）

第2号（2002年3月）

「フリードリヒの世紀」と自由

－カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法－（前編）（斉藤渉）

ドイツ啓蒙主義における「人間の使命」の問題

－シュパルディングの『人間の使命』とその影響－（津田保夫）

社交術と「啓蒙」

－クニッゲ『人間交際術』にみられる处世と啓蒙の関係－（中直一）

クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」（福田覚）

第3号（2003年4月）

エルンスト・プラトナーの『医師と哲学者のための人間学』

－後期啓蒙主義における新しい人間観とその学問の試み－（津田保夫）

快感情の起源をめぐるJ.G.ズルツァーの考察

－アカデミー論文(1751/52)についての覚え書き－（福田覚）

「フリードリヒの世紀」と自由

－カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法－（後編）（斉藤渉）

第4号（2004年5月）

エルンスト・アントン・ニコライの想像力論について（福田覚）

シラーの『生理学の哲学』における心身問題

－その中間力構想と神経精気論の思想的背景－（津田保夫）

フリードリヒⅡ世における公正の観念と司法の独立

－アルノルト訴訟事件に関するドームの報告より－（中直一）

第5号 (2005年5月)

- ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(1) (中直一)
 - ービースターおよびニコライの文書よりー
- 「知識人共和国」は何語で話すか (斉藤渉)
 - ープロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者ー (前編)
- ベルリンのズルツァー (福田覚)
 - ーその生涯と活動の振幅をめぐる素描ー

第6号 (2006年5月)

- ズルツァーの美学事典の体系性をめぐって (福田覚)
 - ー事典形式と理論的な体系性についての予備考察ー
- ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(2) (中直一)
 - ーニコライおよびクラインの文書よりー
- 「知識人共和国」は何語で話すか (斉藤渉)
 - ープロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者ー (後編)

第7号 (2007年5月)

- ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(3) (中直一)
 - ーゲッキングおよびグローナウの文書よりー
- 陶冶の概念としての模倣 (福田覚)
 - ードイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のためにー
- 啓蒙主義者たちの大学廃止論 (斉藤渉)

第8号 (2008年5月)

- ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(4) (中直一)
 - ーシュテルツェルおよびニコライ旧蔵の文書よりー
- 連想と連関の概念としての模倣 (福田覚)
 - ードイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のためにー
- 「現在を軽蔑する権利がない」 (多賀健太郎)
 - ー啓蒙とダンディズムー

第9号 (2009年5月)

Logik als „Vernunftlehre“ (Sho Saito)

— Reimarus, Engel und W. v. Humboldt —

情動論から捉え返した詩学史記述の可能性 (福田 覚)

— 初期啓蒙主義の「修辞学的」側面のその後を追うために —

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道 (前編) (中直一)

第10号 (2010年5月)

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道 (後編) (中直一)

フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動 (福田 覚)

— 「文化的」性道徳と現代の神経失調」を中心に —

教育の公事化 (斉藤 渉)

— フリードリヒ 2 世の文教政策についての覚書 —

第11号 (2011年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について (1) (中直一)

— 総説及び第1巻の分析 (その1) —

ドイツ初期啓蒙主義の情動論をめぐって (福田 覚)

— ヴォルフ、ウンツァー、マイアーが示す学際的な振幅 —

Zu den Quellen der phonetischen Umschrift

in Abel-Rémusat's *Éléments de la grammaire chinoise* (1822) (Sho Saito)

第12号 (2012年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について (2) (中直一)

— 第1巻の分析 (その2) —

I. J. ピューラをめぐる記述課題の諸断面 (1) (福田 覚)

— 敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念 —

Die Universität in dürftiger Zeit (Sho Saito)

第13号 (2013年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(3)(中直一)

— 第1巻の分析(その3) —

医学者 E.A.ニコライの「情念」と哲学者ズルツァーの「感情」(福田覚)

— ドイツ啓蒙主義詩学史の学際的理解の試み —

18世紀の文学外的フィクション(斉藤渉)

— パラテキストの分析 —

第14号 (2017年5月)

ユング＝シュティリングにおける信仰と創作(長谷川健一)

— 『ヨリンゲルとヨリンデの話』を手がかりに —

徳の教育(廣川智貴)

— Ch・F・ゲラート『スウェーデンのG伯爵夫人の生涯』 —

18世紀の自死をめぐる言説の再検討 I (吉田耕太郎)

J.E.シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォクレス」(福田覚)

— 受容の2つの局面から考える詩学史の物語論的再解釈 —

第15号 (2018年5月)

汎愛派の知られざる教育者J・K・ヴェツェル(廣川智貴)

嬰兒殺しをめぐる言説の再検討 I 論争の背景(吉田耕太郎)

レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における父の規範と娘の葛藤(福田覚)

— 両価的感情の物語表現として見た悲劇の構図 —

第16号 (2019年5月)

道徳週誌『画家談論』における想像と模倣(福田覚)

— スイス派初期の作用詩学について —

ユング＝シュティリングの敬虔主義批判(長谷川健一)

— エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』 —

アルプスを見る詩人— ヘルダリーンとエーベル —(廣川智貴)

18世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容について(吉田耕太郎)

— 日本の盲人についての情報とその流布を例に —

第17号 (2020年7月)

文学論争におけるクロップシュトックの評価(福田覚)

— 文学論争の再考にむけて —

ヴェツェルとウィーン(廣川智貴)

— 『喜劇役者たち』を中心に —

神童と天才(吉田耕太郎)

— 18世紀における心的能力をめぐる議論をたどる —

第18号 (2021年5月)

文学論争以前のミルトンをめぐる遣り取り(福田覚)

— 文学論争の再考にむけて(2) —

ユング＝シュティリングの「熱狂」評価(長谷川健一)

— 『テオバルトあるいは熱狂者たち』(1784/85)を手がかりに —

ヴェツェルの教育論と『ロビンソン・クルーソー』(廣川智貴)

優しい父(吉田耕太郎)

— 親子関係から啓蒙を再考する —

執筆者（五十音順）

廣 川 智 貴（ひろかわ　ともき）　大谷大学国際学部　准教授

福 田 　　覚（ふくた　　さとし）　大阪大学言語文化研究科　教授

吉 田 耕太郎（よしだ　こうたろう）　大阪大学文学研究科　准教授

言語文化共同研究プロジェクト 2021

ドイツ啓蒙主義研究 19

2022 年　3 月 31 日　発行

編集発行者　大阪大学大学院言語文化研究科